数年後の日常

おもち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
数年後の日常

【Ｎコード】
Ｎ２７６０Ｏ

【作者名】
おもち

【あらすじ】
数年後・・・新一たちは大学も卒業し、結婚、子供も生まれた。そんな彼らの短編集。　新一、平次、探は探偵になった。快斗はマジシャン（キッド）に。蘭は弁護士に。和葉や青子は警察官に。志保は科学者。園子はお気楽ライフをエンジョイ。真も活躍中・・・・・・そして彼らの子供たちはかつての彼らそっくり。あのころの思い出があざやかに再現される日々。　注：短編集ではない話も多々あります。

設定

工藤新一
言わずと知れた、名探偵。高校生のころから「平成のホームズ」「日本警察の救世主」「東の高校生探偵」と呼ばれている。黒の組織の事件にかかわり、アポトキシン４８６９の副作用で幼児化してしまい、高校２年生の一年間を江戸川コナンとして活動していたことは有名。無事帝丹高校、東都大学法学部を卒業。自宅で探偵事務所を開き、探偵として活動中。

工藤蘭（毛利蘭）
新一の幼馴染。東都大学法学部卒業後、新一と結婚。母のような弁護士になるために修行を重ね、「法曹界のエンジェル」（シャロンにつけられたあだ名から作られたもの）と呼ばれるほどの実力に。空手の腕も年々上がっている。

工藤コナン
新一と蘭の子供。新一（コナン）の生き写し。名前は江戸川コナンからとった。阿笠博士からもらった父と同じ道具と、父と祖父ゆずりの推理力で「東の小学生探偵」と呼ばれている。（新一たちに言わせればただのお遊び。）祖父の小五郎を使って推理して怒られたことも。帝丹小学校に通っているが、時々抜け出す。

工藤愛理　くどうあいり
新一と蘭の子供でコナンの双子の妹。蘭の生き写し。名前はアイリーン・アドラーから優作がつけた。空手の腕、体力、強運などもき

っちり受け継いだ。将来は母（蘭）のような弁護士。コナンの推理オタクっぷりを嫌がりながらも、応援している。

服部平次
西の名探偵。新一とは「西の服部　東の工藤」と呼ばれる仲。京都大学法学部卒業後、大阪府警の近くに探偵事務所をたてた。関西以西のさまざまな地域で活躍している。剣道の腕も全国大会に行くほどで、犯人逮捕にも積極的に活用している。妻の仕事のせいか、依頼のない時は警察と行動を共にしている。

服部和葉（遠山和葉）
平次の幼馴染。京都大学法学部卒業後、大阪府警の女刑事に。平次と大阪府警のパイプ役になっている。合気道の腕は確かで犯人逮捕の際には活躍するが、平次のせいで普段はそれほど活躍はしていない。あだ名は「服部探偵事務所のスパイ」「犯人逮捕の必需品」。義母（静華）との仲もいい。

服部一平　はっとりいっぺい
平次と和葉の子供。平次の生き写し。「西の小学生探偵」「2代目　西の服部　東の工藤」と呼ばれる。名前は平次、平蔵の平と、一番になれるように、から。（平次は新一に言われたことをかなり引きずっている模様。）剣道の腕は確かだが、力がないため、犯人につかまってしまうことも。改方学園初等部に通う。

服部一葉　はっとりひとは

平次と和葉の子供で、一平の双子の妹。和葉の生き写し。かなり面倒見がいい。名前は和葉の葉と一番になれるように、という平次の願いから。「一葉」と書いて「かずは」と読むこともあり、よく間違われるのがトラウマ。

黒羽快斗
2代目怪盗キッド。一応引退したが、今でも挑戦状は受けて立っている。（その経済効果はかなりのもの）東都大学物理部卒業後、本格的にマジシャンとして活動。父（盗一）と同じステージに立つことも。

黒羽青子（中森青子）
快斗の幼馴染。東都大学物理部卒業後、警視庁捜査二課に。父と同じキッド専門の刑事として夫である快斗、義理の父である盗一、息子の月次を追っている。あだ名は「2代目中森警部」「中森刑事」。仕事中は中森の姓を使わせている。

黒羽月次　くろばつきじ
快斗と青子の子供。つい先日3代目怪盗キッドとしてデビュー。名前は月下の奇術師の月と、キッドは快斗、月次は二番目、というバカな理由から。うまくハンググライダーが使えず、只今特訓中。江古田小学校に通う。

黒羽藍子　くろばあいこ
快斗と青子の子供で月次の双子の妹。月次と同じ日に三代目中森警

部としてデビュー。母と同じく、キッドを嫌っている。名前は藍色からとった。

白馬探
海外の名門大学を卒業後、世界を駆けまわる名探偵に。忙しくて現場に行けないため、調書や写真だけで事件を解くこともあり、海外でも有名。

白馬志保（宮野志保）
いったん東都大学薬学部に入った後、何度か海外に留学した。探とは遠距離恋愛の末、結婚。科学者として阿笠博士や母エレーナと新薬などをを研究中。忙しい夫の代わりに事件の捜査に行くこともあり、最近は探偵としての能力も伸ばしている。生活拠点は海外だったが、息子の教育を考えて日本に戻る。

白馬賢　はくばけん
探と志保の息子。コナン達と同い年。両親に似てクール。同世代のメンバーのなかでは両親の仕事の関係で英語が一番できる。髪が茶色であることが最近の悩み。

京極真
空手のチャンピオン。最近は日本に帰ってくることも増えた。日本にいるときは鈴木スポーツ後援　京極真空手道場」の講師として活躍。

京極園子（鈴木園子）
帝丹大学卒業後、お気楽なＯＬに。真と結婚、出産後は専業主婦に。と思ったら、実家の鈴木財閥の子会社、「鈴木スポーツ」社長に就任。子供が割と大きくなってからは本格的に事業を広げている。またキッド好きを生かし、怪盗キッドの専門家になった。実家が金持ちなので、生活にはまったく困っていない。

京極友子　きょうごくともこ
真と園子の娘。コナン達と同い年で愛理とは空手仲間でもあり、親友。母に似て明るいお調子者だが、父の性格も受け継いだため、母ほどではない。友達を大切にできるイイ子。

工藤家の法廷

（どうしよう…。）

蘭は悩んでいた。

蘭が担当したこの事件は明らかに不利だった。

アリバイもなく、証拠もそろっている。

母にやめておきなさいと言われた意味がやっとわかった。

でも、無実の人を見捨てるわけにはいかない。

「あっ、蘭。まだ仕事してたのか？」

「新一。新一は仕事済んだの？」

「あったりめーだっつうの。ちょっとした人探しだしさ。でも依頼料はいいほうだぜ。そっちは？」

新一は自宅に探偵事務所をたてた。蘭も隣の部屋を仕事部屋にもらった。

だからどちらかが仕事場に来て手伝う、なんてことはよくあった。

「そういや・・・子供たちは？」

「コナンと愛理？　お父さんたちに預かってもらってるの。迎えに行かなきゃ。」

「いや、いいよ。蘭は蘭の事件に専念すべきだ。俺が迎えに行くよ。メシもてきとーに作っとくからさ。３日後だろ、裁判。」

「ううん、大丈夫。さっき連絡を入れておいたから・・・今日は子供たちはあっちにお泊り。それに裁判は２日後。３日後は推理小説の発売日でしょ？」

「そういやそうだな・・・じゃあ、無理か・・・。」

「何が？」

「あぁいや・・・どっか食べにでも行こうかなって思って。」

「無理よ。この人は無罪よ。でもすべてが不利。どうすればいいの？」

「なんなら俺が手伝おうか？」

「えっ、でも・・・。」

「事件のこと、詳しく教えてくれ。」

「・・・うん。被害者はね・・・・・・。」

プルルルル・・・・

「はい、工藤探偵事務所です。」

蘭は受話器にむかって言った。

蘭はまだ自分の事務所はもっていない。あくまで母の事務所に所属している身だ。

でも、仕事場が自宅なのは知られていたし、こう言って困ったことはない。

「お母さん？」

「愛理？」

「わあ、コナンの言ったとおりだ！　家の電話に何回もかけたんだけど出ないから、困ってたんだけど、仕事用のにかければ出るかもってコナンが言ってたの。」

「ごめんね。でもさすがコナン。新一よりもいい探偵さんね。」

「お母さん。お仕事どう？」

「全然だめ。」

「そっか・・・。」

「お仕事大変だから、コナンと愛理は今日は毛利のおじいちゃんたちのところにお泊まりしてくれないかな？」

「うん。いいよ・・・。」

「本当にごめんね。」

「大丈夫。お母さん、お仕事がんばってね！」

「ありがとう、愛理。」

「愛理から？」

「うん・・・さあがんばらなくちゃ！」

「犯人は・・・あなたですね！　笠間さん！」

「・・・・・・ああ、そうだよ。あいつはな、俺の人生をめちゃくちゃにしたんだ！　あいつは・・・ううっ・・・。」

（新一！　ここ法廷だよ。なに推理ショーしてんのよ。）

新一のおかげで新たな証拠がみつかり、蘭は見事勝利をおさめた。

もっとも、新一が勝手に推理ショーを始めてしまい、裁判はぐちゃぐちゃになってしまったのだが。

「では・・・これにて・・・・・・。」

裁判官の合図で全員が立ち、裁判は閉廷した。

「お母さん！」

「愛理！　来てくれたの？」

「どうしても行きたかったから、連れてきてもらったんだ。おばあちゃんも見たかったんだって。」

「おばあちゃん？　本当だ、お母さん来てくれたんだ。」

「蘭、がんばったわね。あの状況から無罪に持ち込むなんて、なかなかやるじゃないの。」

「本当よ。さすが法曹界のクイーンの娘、法曹界のプリンセスでその優しさから法曹界のエンジェルとも言われている、立派な弁護士ね。工藤弁護士。」

検察のマドンナこと、九条検察官がやってきた。

「あっ、九条検察官。見ていらしたんですか？」

「ライバルの娘さんがすごい裁判をやるらしいって聞いたから仕事を蹴ってきたのよ。本当に親子ね。探偵の力を借りるなんて。」

「えへへ。」

「でも、お父さんもお母さんもすんごくかっこよかったよ。ね？コナン。」

「ああ、すごかったぜ。」

「あら、お孫さん？」

「ええ。コナンと愛理、双子なの。コナン、愛理、挨拶して。こちらは九条検察官。検察のマドンナっていわれるくらいすごい方でおばあちゃんのライバルなの。」

「「こんにちは！」」

「2人とも、将来、検察に来ない？」

「ううん。将来はお母さんやおばあちゃんみたいな弁護士になるの。コナンは探偵だよ。」

「そうなの？　残念だな。では、用があるので。次は法廷でね。毛利弁護士。」

「楽しみだわ。九条検察官。」

「蘭、飲むか？」

新一がコーヒーを持ってきた。

半ば徹夜だった蘭にとって、コーヒーはありがたかった。

「ありがとう・・・。」

「コナンに愛理。元気だったか？」

「うん。」

「父さん！　さっき一平から電話もらったんだけど・・・一平がまた事件解いたって・・・負けちゃったよ。」

「コナン！　推理に勝ち負けなんかないんだ。気にすることはないよ。」

「でも・・・。」

「事件なんかないほうがいいんだ。まあ、服部がそうゆう性格だからな・・・。」

「お母さん、おつかれさま。」

「ありがとう、愛理。そうだ、今日の晩御飯どうしようか？　何が食べたい？」

「なんでもいいよ。お母さん疲れてるし・・・。」

グウゥ～

「おなかすいてるんでしょ？　おばあちゃんのご飯食べられなかったから。」

「うん・・・。」

「ハンバーグにでもしよっか。新一！　コナン君！・・・あっ。」

蘭は顔を赤くした。

「母さんってさ、僕のことたまに君で呼ぶよね。なんで？」

コナンは幼いころの新一そっくりにすねてみせた。

「・・・・・・。」

「もう、話そうぜ。全部。」

新一がいつまにかこっちに来ていた。

「ニュースやなんかで知ってるだろうけどさ。俺たちからは何にも話してないだろ？　詳しいことも、ちゃんとしたことも・・・。」

「・・・そうだね。話そうか？」

「それって黒の組織とかのこと？」

「ああ。コナンと愛理はどこまで知ってるか？」

「父さんが江戸川コナンになったこと。志保おばさんが悪い人の仲間だったこと。で、灰原哀になったこと。」

「快斗おじさんが怪盗キッドだったこと。でも、悪い人たちは倒せたんだよね？」

「・・・それくらい、かな？」

「あたしも。テレビで見たり、平次おじさんとかが話してくれたりしただけだもん。」

「話は俺たちが高校2年生。蘭が空手の都大会で優勝して・・・・・・・。」

工藤一家は思い出話に浸りながら、ある場所に向かった。

「ここは刑務所ってところだ。ここに黒の組織のメンバーが何人かいるんだ。」

面会室に、入ってきたのは金髪美女、ベルモットことシャロン・ヴィンヤードだった。

「あら、ｃｏｏｌ　ｇｕｙにａｎｇｅｌ。あらあら、子供づれ？」

「シャロン・・・。」

「まずは差し入れの本。」

「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ」

「シャロン、今日裁判で勝てたの。」

「その裁判、聞いたことがあるわ。そう・・・よかったわね。」

「新一のおかげなんだけど・・・。この子たちに会うの始めてよね？　コナンと愛理よ。」

「「こんにちは・・・。」」

「なんだよお前ら、元気ないな。」

「もしかして、わたしのことが怖いの？」

「・・・う、うん。」

「んなわけないって。銃持ってるわけじゃないし・・・なあ愛理。」

「やっぱり怖がってるわね。」

「大丈夫。シャロンイイ人だもん。さっきお母さんが言ってたじゃん。」

「愛理ちゃんだっけ。ほんと、ａｎｇｅｌそっくり。」

「厚司さんには・・・会わないのか？」

新一が聞いてきた。

「だめ！」

「蘭？」

「この間志保ちゃんが言ってたの・・・賢くんにもまだちゃんと話してないって・・・厚司さんにも会わせてないって・・・。」

「なんで？　お母さん。」

「愛理・・・コナン・・・いままで話したこと、賢くんに話さないでね・・・。」

「どうしてだよ、母さん。真実を知るべきだよ。」

「コナン！」

「いいかコナン、愛理・・・もし今話したことを父さんたちじゃなくて・・・他の人から聞いたらどう思う？　実のおじいさんが犯罪者だとお前たちに言われたらどう思う？　賢はあいつらに似てクールだけど・・・大人びているけど・・・まだ小学生だ。少なからずショックを受ける。」

「ね？　だからお願い。まだ賢くんも厚司さんに会ってないの。わたしたちが先に会うわけにはいかないでしょ。」

「昔快斗に言われたことがあるんだ。真実を隠しておいたほうがいいときもあるって。黒の組織と関わって感じたよ、そんな時もあるなって。」

「わかったよ。」

「あたしも絶対話さない！」

「じゃあ帰ろっか？　今日はハンバーグね。」

「「おおぉ！」」

「本当に新一の生き写し・・・えっ、志保ちゃん？」

「ああ、蘭さんに工藤君。久しぶりね。」

「宮野・・・白馬もか。」

「賢くん！　久しぶり！」

「あっ、コナン君に愛理ちゃん。久しぶりですね。」

「志保ちゃん・・・。」

「賢にすべて話したの・・・父に会いに来たわ。」

「全部、話したの？」

「ええ。」

「すげえ。俺たちと一緒。」

「工藤君たちも全部話したのね・・・。」

「服部君や黒羽君も話したらしいですね。」

「じゃあ、これから会いに行ってくるわ。」

「わかった・・・そうだ志保ちゃん、夕ご飯一緒にどう?」

「遠慮しとくわ。遅くなりそうだから。」

「そういや白馬。おまえいつまでこっちにいるんだ?」

「しばらく日本にいますよ。では、いつかまた。」

「俺の推理じゃあ、次に会うのは事件現場かキッドの挑戦状の現場だな。」

「たぶん、ですね。そうならないといいですが。」

服部家大活躍

「お、おはよう・・・。」

「父ちゃん遅いで。」

「ねぼすけやなぁ。」

「ほんまやなぁ、一平、一葉。」

「オカンうるさいんや。ふわぁ・・・和葉は？」

「平次が寝てる間に出勤したで。平蔵もついさっき出てったわ。」

プルルルル・・・

「なんや和葉。いま飯食い終わ・・・。」

「平次、今すぐ来て！」

「へえ？」

「事件や事件！　場所はな・・・・・・。」

「和葉、声でかいんや・・・せやから・・・。」

「事件やって？　はよいかな。」

「ほらぁ、一平にばれてしまいおった。ボケ！」

「なんやて！？　まあどーせヒマやろ？　はよ来てや！」

ピッ・・・

「和葉？　きたでぇ。」

「平次！」

「平ちゃんなにしてるん！？」

「ああ、大滝はん。和葉に呼ばれてなぁ。ははは・・・。」

「また和葉ちゃんか？　そないなことしてるから『服部探偵事務所の女スパイ』やなんて言われるんやで。」

「へへ、すんまへん。ほんまは呼びたくないんけどな。平次ばっか活躍するから『犯人逮捕の必需品』よばわりされるんや。」

「なんやて！？」

「でも、平次がおらんと無理やろ。」

「死因は・・・刺殺やな。」

「一平！　なにしてるん！」

「えっ、捜査や。」

「あかんやろ・・・一平。」

「大丈夫やで、母ちゃん。俺西の小学生探偵やもん。」

バシッ

「アホ。そんなんタダのお遊びや。おまえは引っ込んでろ！　父ちゃんや母ちゃんに任せとけ・・・。」

バシッ！

「ここは警察の領分。探偵は引っ込んでろ。」

「親父・・・。」

「ほ、本部長。遠山のおやっさんも・・・なんで？」

「ホシが昔追ってたやつらかもしれんくてな。ちょっと様子見に来たんや。」

「お父ちゃん！」

「和葉。元気にしてたか？」

平次と一平はそのそばでブスっと座り込んでいた。

ギギぃー！

「和葉、もうちょい安全運転せえや！　一平と一葉も乗ってるんやで！」

「知ってるわ。」

和葉は警視庁の佐藤刑事（めでたく高木刑事と結婚。）に運転技術を教わって以来、犯人追跡の際は暴走するようになった。

ブーン！

ギぃー！

「はぁ、はぁ・・・。」

犯人の大男が車から降り、走って逃げようとした。

「待てや！」

和葉は仁王立ちで犯人を迎えた。

周りには大勢の警察官がいた。

「てやー！」

「うっ！」

だが犯人は大男。和葉の合気道を食らったにもかかわらず、すぐに立ち上がった。

「ああっ、一葉！」

すぐそばに、一葉が立っていた。

「まかせて！　えいっ！」

「うっ！」

いくら和葉の合気道を受け継いだとはいえ、まだ子供だ。

大男は躓いた程度で終わった。

「一葉ぁ！」

「きゃぁ・・・。」

「てやーっ！」

コン！

「なんや？」

一平が棒きれを剣道の要領でぶつけたのだ。

一葉はそのすきに逃げた。

が、大男につかまった。

2人は大男に拳銃を押しつけられ、動くこともできなかった。

「くそっ。」

平次と和葉は同時に飛び出した。

「てやーっ！」

「はっ！」

「動くな！」

バーン！

「和葉！　伏せろ！」

「ええっ！？　きゃっ！」

バーン！

「動いたら子供の命はないぞ。」

「くそっ。」

「孫の命はなににも変えられんでな。」

「ほんまや。」

「おっおまえは・・・服部平蔵と遠山銀司郎！」

「てやーっ！」

平蔵は思いっきり飛びかかった。

バーン！

「平次！　行けや！」

「お、親父！」

「本部長！」

バーン！　バーン！

「おじいちゃん！」

「一平、一葉！」

「頭下げろ！」

「・・・お父ちゃん？」

「親父？」

カチャ・・・

「逮捕や。ったく世話かけやがって。」

「親父？」

「防弾チョッキ着てたんや。」

「おじいちゃんかっこええ！」

「ほんまや！　かっこええ！」

「平蔵、血ィでてるぞ。」

「お前もやで。」

「ほ、本部長！　遠山のおやっさんも！　すぐ病院いかな！」

プルルルル・・・

「はい、へえ？　オカン？」

「平次まだなん？　せっかくてっちり作ったんやけど、冷めてしもうたわ。まだ帰れへんの？」

「オカン・・・。」

キッド争い1

黒羽快斗は、劇場に忘れ物がないかを確認し終わり、劇場から外に出た。

車のカギをお手玉しながら、自分の愛車に乗った。

「ではぼちぼち帰り・・・・。」

プルルルル・・・

「なんだ？　工藤？」

ピッ

「もしも・・・・。」

「黒羽ぁ！」

「はぁ！？」

「はぁ、じゃねえだろ？　今度はどっちが行くんだ？」

「何に？」

「キッド。」

「えっ、マジ？」

「次郎吉さんが挑戦状出したって、聞いてないの？」

「・・・ヤバッ。ちょっとパス！」

快斗は車に飛び乗った。

「今回はわたしが行く。もう返事も送ったからな。」

「って親父またかよ！　もう連続で５回目くらいだろ？」

「そーだそーだ。おじいちゃんずるい！」

盗一、快斗、月次の３人が、黒羽家の居間で壮絶な戦いを繰り広げていた。

「わたしだ。」

「俺だっつーの。」

「僕が行く。この間デビューしたもん！」

「俺に着いてっただけだろーが。俺が行く！　俺俺俺！」

ドカン！！

何かが落ちるというか、落とされたというか、たたきつけられたというのか・・・。

とにかく木がぶつかる嫌な音がした。

「キッドはダメ！　何が何でもだめー！」

エプロン姿でフライパン片手に凄みを利かせている青子がいた。

そのそばに、母親そっくりに睨んでいる藍子がいた。

盗一と千影は海外にいて、今盗一は電話越しに話していた。

「あたしたちの前で誰がキッドに行くなんてくだらない話をしないで！」

「なんだと！」

「くだらない！？」

「くだらないわよォ！」

「とにかく、御飯よ！」

「ラッキー☆」

「キッドにはあげないから！」

「「・・・。」」

「では、わたしがキッドになろう。」

「「はーい。」」

この時、２人のキッドは同じことを考えていた。

（乱入してやる。）

キッド争い２　黒羽家の葛藤

「快斗？　か、い、と？」

「・・・・。」

「いい加減にして！」

「・・・青子か？　ってどうしてここに？」

「自分の家の隠し扉くらい知ってます。」

ここは快斗の作業部屋。

今までのところは総合ルームにした。

で、３人はそれぞれの作業部屋をもらったのだ。

「何だよ。入ってくるな。」

大阪の地図とにらめっこしている快斗は、少しいらだったようだった。

「月次と藍子のこと。」

「ん？」

「本当によかったのかな？」

「何が？」

「キッドと中森警部にしちゃって・・・。」

新一の生き写し、コナンは東の小学生探偵に。

平次の生き写し、一平は西の小学生探偵に。

ちやほやされる2人を、いつも月次はうらやましそうに見ていた。

愛理や一葉も、特技を生かして、生き生きと生活していた。

そんな2人を、藍子もうらやましそうにしていた。

2人は普通の子供だったから。

だから、快斗と青子は前から約束していた。

「お前たちはキッドと警部になれ。」

「あれ、いけなかったんじゃないかなって・・・。」

「・・・まぁキッドは犯罪者だしな。」

「そうだけど・・・キッドが・・・快斗や盗一さんや月次が活躍するたびに・・・わたしたち、青子と藍子は追いかけて、家はいつも・・・真っ二つ。」

「確かにな・・・いい環境じゃ、ないよな。」

「もう、後戻りはできない。キッドも世の中のためになってるし。」

「はあ！？」

「いいんじゃないか？　普段は仲いいし。」

「でも！」

「絶対に月次を危険な目には会わせないから。」

「・・・わかった。青子も藍子には危険な目に会わせない。」

「ってあたりめーだろ・・・・って早く出てけよ！」

「ええ出て行きますとも。月下のコソ泥さん♪」

「怪盗だぁ！」

Hakuba family's night

「賢！　寝る支度はできた？」

「うん。」

賢は大きく伸びをした。両親はまだ起きているはずだ。世界を駆け巡る両親は、夜も仕事をしている。そうしないと海外と時間が合わない。

プルルルル・・・

「Hello. This is Hakuba. Oh, are you? Thank you very much. ……yes……oh, me too. ……ok see you! I am glad to talk you!」

母、志保の英語。基本はアメリカ英語。でも両親ともにイギリス英語の影響を受けている。

どこか言いまわしや発音がイギリス風だった。

（でも何でだろう？　なんでぼくの家は英語も使うの？）

賢が小さいころから、英語と日本語の両方が使われていた。賢自身

も、英語で話しかければ英語で、日本語なら日本語で答えていた。
どちらも不自由ではない。

「Ｋｅｎ！　Ｙｏｕ　ｍｕｓｔ　ｇｏ　ｔｏ　ｂｅｄ．」

「Ｍａｍ！　Ｗｈｙ　ｄｏ　ｙｏｕ　ｓｐｅａｋ　Ｅｎｇｌｉｓｈ　ａｎｄ　Ｊａｐａｎｅｓｅ？　どうして日本語と英語なの？」

「賢、どういうこと？」

「・・・僕は英語話すから外人？　それとも日本語話すから日本人？　どっちもはなすのはなんなの？　ぼくはどっちなの？」

「わたしは半分イギリス人で半分日本人。父さんは日本人。あなたも日本人よ。」

「日本人は英語話せないんでしょ？」

「そんなことないわ。父さんとか工藤のおじさんたちはどう？」

「それは別だよ。学校で言われたんだ。子供のくせに英語話せるなんて日本人じゃないって。」

「誰に？」

「黒羽君。英語教えてたら言われたんだ・・・。」

「彼らしいジョークね。」

「けどそしたら周りの子がみんな言うんだ。茶髪だから外人、英語話すから外人って・・・。」

賢は涙を流していた。

志保は悩んだ。

かつて自分も、そうやってアメリカでいじめられた。

志保の赤みがかった茶髪、探の茶髪を賢は思いっきり受け継いだ。

「国際人って知ってる？」

「国際人？」

「賢は日本人。でも少し違うところがあるでしょ？」

「うん。」

「じゃあ他の子よりも外国で活躍できそうじゃない。父さんみたいに。」

「oh！ You must go to bed early！」

「I see…. Good night！」

「Good night, baby…. おやすみなさい、賢。」

キッド争い3　大阪に集合っ！

「しっかし残念やなぁ・・・今回は大阪やって聞いたからめっちゃ楽しみやったんに・・・。」

「しかたないだろ？　親父にとられちゃったんだから。」

「まあええわ。俺は今回は見物っちゅうことで・・・親父や和葉の活躍を評価させてもらいます。」

「なんで和葉ちゃんが？」

「あったりまえやろ？　あいつも今は大阪府警捜査一課の女刑事や。」

「服部探偵事務所の女スパイ、だろ？　おめえ何やってんだ？」

「工藤！　びっくりさせんなや・・・。」

「今回は俺たちの出番はなしか・・・黒羽がんばれよ。」

「しょうがないだろ？」

「これで何回目ですかね。盗一さんのキッド。」

「白馬・・・。」

「盗一さん相手じゃ毒薬は使えないわ。」

「宮野・・・。」

「今は宮野じゃないわ。白馬だけど。」

ついにxデー。快斗は中森警部と中森刑事と娘の藍子、ついでに服部刑事（和葉の事）や服部本部長、遠山刑事部長ら大阪府警の刑事や警視庁の刑事が駆け回っているのを情けない表情で見ていた。仕掛けは何日も前に仕掛けてある。

月次もしかり。コナンや一平に賢、愛理や一葉に友子と話していた。怪盗キッドが来るとなると、最近では予告現場付近に集まるファンのために出店まで出る。キッドグッズはもちろん、待っている間に食べるものや飲むもの、楽しむもの・・・とエスカレートしていき、今ではまったく関係ないものまで売られている。でも売れるのだ。

挑戦状を出したほうも、大型画面を出したり警備員を増やしたりと工夫を凝らす。自社の製品をファンに配ったりする者もいた。経済効果は底知れないのである。ある意味キッドも役に立っていた。

とにかく凄い人出だったが、快斗たちは機動隊員の間でゆっくりできた。

「あっ、お母さんだ！」

友子が叫んだ。確かに臨時に設置された大画面に園子が映っていた。

「今回は京極園子さんも呼んでいます。園子さんは鈴木財閥の御令

嬢で大のキッドファン。キッドのことに詳しく、今は怪盗キッドの名解説として有名です。」

「はーい！　京極園子です！　今回のキッドは盗一さんとの情報が入ってきました。だから今回は新一君たちがいないのね。」

「園子・・・てめえ・・・。」

新一がつぶやいた。

「その分、工藤優作さんらが活躍しています。」

「園子ちゃんやない！」

和葉だった。警察であることを示す腕章がついている。

「えっ、ああ和葉ちゃん！　久しぶり。そっか、大阪府警の女刑事さんなんだっけ？」

「せや。けど平次ばっか活躍するんや。園子ちゃん、青子ちゃんには会った？」

「ううん。」

「そっか。たぶん来てると思うてたんやけど・・・。」

「こらぁ！　何してるんだ！　そんなチンタラしてたらまたキッドに逃げられるぞ！」

「お父さん、あっちはチェックした？　大学の物理では・・・・。」
「お母さん、チェックしたよ。大丈夫だった。」
「さすが藍子。しっかりしてるわね。」

「あ、いた・・・・。」
「ほんまやね。」

「黒羽刑事・・・・えっと。」
「今なんて呼んだ？」
「いやその・・・・青子さんのこと・・・・。」
「仕事中は中森使えって言ってるでしょ！」
「ですが中森だと警部とかぶ・・・・。」
「お父さんは中森警部。青子は刑事。わかった？」
「は、はい・・・・。」
「青子ちゃん！」

「園子ちゃんと和葉ちゃん！　久しぶり！」

「お宅はどうなの？」

「お宅・・・？」

「怪盗キッドさんはお元気？」

「快斗たちのこと？　ほんとくだらない。電話越しに喧嘩したり、家じゅうに隠し扉付けたり。」

「さすがやね。」

「月次、宿題もやらないですっとこもってるの。今回はおじいちゃんなのに、バカでしょ？」

まあ園子たちがテレビからやっと消え、白鳥警部が現れた。

「白鳥警部、警察官としては、この警備をどう思われているのでしょうかっ！？」

「素晴らしいと思います。今回は次郎吉氏ら鈴木財閥の素晴らしい警備はもちろん、わが白鳥財閥も協力し、たとえベテランの盗一氏でもそうそう逃げられないでしょう。」

（親父のペースにはさせないぜ。）

「黒羽快斗さん？　快斗さん！？」

「へ？」

快斗はふっと振り向いた。

テレビとリポーター・・・・。

「ぎゃぁああ！」

「失礼します！　また盗一氏がキッドですが、今回はどのようなお気持で？」

「まぁ親父のお手並み拝見、ってところで。」

「なにか協力はなさるのですか？」

「いいえ何も。たぶん寺井ちゃんがなんとかしてるんじゃないでしょうか。」

もう少しでキッドの犯行予告の時間。
快斗と月次は、それぞれそーっと現場に向かった。

「黒羽ぁ！？　黒羽ぁ！？」

「どうした服部？」

「黒羽君に何か用でも？」

「いや・・・あいつにたこ焼き頼まれてやあぁっと買ってきたんやけど、いないんや。」

「お前バカか。携帯電話持ってるだろ？」

「ほんまやな。」

「あと数分でキッドの犯行予告です！　警備はますます厳しくなり、殺気立った重苦しい雰囲気があたりを包んでいます。はたして愛しのキッド様は無事あのビッグジュエル、ガラス色のロケットを盗みだせるのでしょうか！？」

園子が画面越しに叫んだ。

ガラス色のロケット。大粒のダイヤのロケットだ。鎖は銀だが、それ以外はダイヤモンド。中に入れた写真やら何かがきれいに透けて見えるのだ。

「青子ぉ！　藍子ぉ！　気を引き締めろぉ！」

「お父さんこそ、引っかからないでよ！」

「わかってるって！」

「藍子。あっち行ってて！」

「うん。見張ってる・・・・・。」

ピピピピ・・・

プチっ！

「今の音なんだ？」

新一たちはテレビの画面と平次の携帯を見比べた。

「まさか・・・・。」

新一たちは大急ぎでビルを登って行った。

（黒羽が何かやろうとしている・・・・。）

そう思いながら。

キッド争い４　前半戦

「５秒前、４，３，２，１・・・。」

プシューっ！

白い煙がもくもく立ち込めた。

「はーはっはっはっ・・・。」

盗一キッドがロケットを掲げた。

「では失礼。」

だが煙は出なかった。

そのまえにトランプ銃が火を噴いたのだ。

「親父。ロケットはいただくぜ！」

「ああっ、キッドがもう１人！　あれは快斗君！？」

園子が叫ぶ。

「キッドを捕まえろぉ！」

「警部、どっちの！？」

「快斗のほうよぉ！！」

快斗キッドはリモコンを押した。

で、ガラスが割れ（ここはガラス張りの最上階）、そこから隣のビルにハンググライダーで。

そこから逃走。

の手はずだったのだ。風向きは悪いし、ビルは東京ほど高くないから、ハンググライダーはそんなに使えない。

シュパーン！

「父さん、もらうぜぃ！」

「あれは先日デビューした、月次キッド！　これは作戦なのか！？
　それともただの仲間割れか！？」

盗一が茫然と（ポーカーフェイス？）眺める中、快斗はリモコンを探して駆け回り、月次はロープでゆっくり屋上に向けてのぼって行った。

「いっけぇー！」

コナンがボールを思いっきり蹴った。その姿、まさに眼鏡なしの江戸川コナン。

「わわぁ！」

月次はドカン！　っと快斗の上に落ちた。

「お前なにやってんだよ！」

「父さんこそ！」

「親子げんか中・・・失礼します！」

青子はそろりと寄って、モップを振りかざした。

「やばっ！？」

ドカン！

「黒羽君と月次君が青子ちゃんにモップで投げ飛ばされた模様です。カメラ、早く来て！」

一緒に盗一も飛ばされた。

「いってぇ・・・。」

その時だった。

何か影がよぎった。

「このロケット、いただくわ。」

「あ、あれは・・・。」

警察関係者や、報道陣がどよめく。

「ふぁ、ファントムレディ!!!」

盗一の妻で、快斗の母、青子の義理の母で月次と藍子の祖母。黒羽千影。

ファントムレディ。

が、黒羽家の４人の怪盗は、あっさり囲まれてしまった。

服部家の面々に。

「黒羽、えらい久しぶりやな。」

「それは親父だけや。俺にたこ焼き買わせといて何してんのや！」

「千影はん。えらい久しぶりやなぁ。」

「月次。覚悟せいっ！」

次の瞬間、４本の竹刀がキッドとファントムレディを襲った。

快斗と月次はギリギリでよけた。

が、盗一と千影夫妻は、平蔵と静華夫妻に苦心中。

（（ラッキー☆））

「黒羽君？」

「月次君？」

「「ん？」」

「うちらのこと、忘れてへん？」

「うちも合気道やってるんやで。それにお母ちゃんは・・・。」

「犯人逮捕の必需品や！」

☆☆☆！

快斗たちはあわてて立ちあがった。

「あきらめなさい！」

お次は蘭、愛理、友子・・・。

空手パワーになすすべもない。

「ぐへぇ・・・。」

倒れこんだ快斗の前に、リモコンがあった。

「ラッキー☆」

また煙幕が出てきた。

キッド争い５　後半戦

快斗は煙幕にまぎれて逃げるか変装しようとした。

突然の煙幕に一同大混乱。

が、煙はあっけなく消えてしまった。

「父のレシピ通りに作った薬品よ。どう？　なかなか使えるでしょ。」

志保がフラスコをちらつかせた。

「Ｉ’ｖｅ　ｊｕｓｔ　ｆｉｎｉｓｈｅｄ　！」

賢が叫んだ。なめらか過ぎる英語。月次は分からなくて一瞬あせった。快斗、千影、盗一も何のことかわからない。

が、次の瞬間、警官隊を含む大勢の人間が飛びかかってきた。

「やべぇ！」

が、さすがキッドとファントムレディ。ポーカーフェイスでにやり。

「なんのおまじないだ？」

中森警部が一瞬たじろぐ。

次の瞬間、煙幕がまたすごい勢いで出てきた。

白い煙幕がかなり立ち込め、敵味方関わらず難儀中。

「もう、出しすぎよ！　困るわ・・・。」

千影がロケットをポケットから出す。

「曇っちゃうじゃない！」

「おばあちゃん！　もらうぜ！」

「ああっ！」

月次はロケットを手に走り出した。

「ちょっと待った！」

快斗は月次の前に立ちふさがった。

「何だよ・・・。」

「サーストンの三原則は？」

「ええと・・・。」

「もーらい！」

少々卑怯な手で息子から奪った快斗は、ワイヤーを天井にからめた。
そのまま上に行くはずが・・・・。

「黒羽君!!!」

「げっ、白馬・・・。」

探はすぐそばの梯子をのぼりはじめた。

ワイヤー銃は何者かに（おそらく賢）壊されており、上に行きたければ根性でのぼるしかない。

煙幕の上での根性バトル。

が、突然2人は落ちてしまった。

盗一が気づき、トランプ銃を放ってきたのだ。

「「ぎゃぁあ!」」

盗一はロケットをとると、マントを翻した。

（あとは脱出するだけ・・・ポーカーフェイス・・・。）

「どこへ行くのかしら？　怪盗キッドさん？」

ファントムレディこと千影がにやっと笑って立っていた。

「ポーカーフェイス、崩してあげるわ。」

カチャ・・・

銃が突き付けられた。

「ふっ・・・甘いな。」

「そんな軽口叩けるの？」

バーン！

銃口から大量の水が噴き出した。

「宝石はもらうわ・・・。」

シュパーン！

「母さん！　もらうぜ！」

煙幕が薄れてきた。
快斗は走り去った。

「待てよ。忘れもんだぜ。」
新一がしゃがみ込み、キック力増量シューズを鳴らした。
「まっ、まさか・・・お前あの化け物シューズ使う気か・・・大人なのに？」
「そのまさかさ。」
小学生であのキック力だ。大人が蹴ったらとんでもないパワーになる。

ボールが思いっきり飛んできた。
「ぎやぁあ！」
快斗はかろうじて避けた。
サッカーボールはそのままガラスに当たり、バリバリと嫌な音がした。

カラン・・・

ロケットが手から落ちた。

「親父、もらうぜ！」

そこに月次が現れた。そのまま駆け抜ける。

そして大勢のテレビ、警官らに囲まれて、ニヤッと笑った。

そのほほ笑みは、まさに「怪盗キッド」だった。

キッド争い5　決勝戦

「キッドぉ！　どうするつもりだ！　もう逃げられんぞ！」

少し優しい中森警部の声。無理もない。孫はかわいいのだ。

割れた大きな窓から風がさらりと吹いた。

月次はポケットの中でスイッチを押す。

しばらくの沈黙。

そとで歓声が上がった。

みると、真っ黒の超巨大風船がゆっくり下りてきていた。

「まさか・・・。」

快斗はかつての自分を思い出す。

火星人を名乗って授業を抜け出そうとした、あの日。

「あいつ、あれで上にあがってハンググライダー乗るつもりか？」

そこで快斗は重大なことを思い出した。

「あいつ・・・まだハンググライダーうまく使えないんじゃ・・・。」

「では・・・。」

月次はさっと風船に乗ろうとした。

「月次！　やめろぉ！」

快斗は叫んだ。

「まちなさーい！」

「藍子！　やめなさい！」

藍子は月次を捕まえようと、突っ走った。

「やめろ！　藍子！」

どこかの映画のスローモーションのように、快斗はゆっくり体の向きを変え、手を伸ばしたが、届かなかった。

「藍子！」

青子が藍子をつかんだ。

「待ちなさい！」

「藍子！」

月次はあわてて巨大風船に飛び込んだ。

と、ほぼ同時に藍子が飛び出す。

藍子の腕をつかんでいた、母青子と共に・・・。

「青子ぉ！」

中森警部が、ビルの最上階の窓から体をほとんど前のめりにして飛び出していた青子を、腰のあたりで思いっきりつかみ、引っ張り上げた。

が、藍子は完璧に飛び出し、そのまま巨大風船に突っ込んだ。

「おわぁ！　藍子やめろぉ！」

パン！

風船は意外とあっけなく割れた。

快斗はあのとき、風船自体をクレーンで引っ張り上げていた。

けれど、月次はそうはしていなかった。

ハイスピードカメラの映像のように、ゆっくり、ゆっくり、月次と藍子は落ちて行った。

下の群衆の悲鳴が起こる。

「藍子―ぉおお！　月次―ぃぃぃ！」

青子の悲鳴が上がる。

長い長い悲鳴だった。

悲痛な母の叫びだった。

月次と藍子の母親の、母親の叫びだった。

青子は子供たちを助けようと、身を乗り出した。
快斗もわずかな差で飛び込んだ。

「バカ青子！　やめろぉおおお！」

中森警部が青子を奥へ押し込んだ。
千影が青子を組み伏せた。

「青子ちゃん、落ち着いて！」

「嫌！　いやぁああ！」

青子は知っていた。月次がまだハンググライダーでうまく飛べないこと、まだ仕掛けが不十分なこと。
快斗がマジックショーの間に必死に教えても、まだ飛べていないこと。
そんな状態で高層ビルの最上階から落ちたらどうなるのかも・・・。

「行かせて！」

青子は千影と、応戦していた有希子（捜査官をいたるところにひそませていたのだ。）たちを振り切り、窓際に駆け寄った。

落ちていく月次は、妹の藍子にむかって叫んだ。

「手を！」

月次は藍子の手をつかみ、ハンググライダーのスイッチを入れた。

「おおぉ！」

見物人から声が上がる。これが盗一や快斗だったらそのまま逃走しただろう。だが月次は、まだ翼を使えこなせていなかった。

ハンググライダーは、落下速度をわずかに遅くしただけだった。

悲鳴があちこちで上がる。

月次も藍子も半ば死を覚悟した。

月次は藍子を抱きしめる。

ゆっくり落ちながら・・・。

月次は自分のミスに気づいていた。自分がハンググライダーで飛べないことも分かっていた。

そのせいで、妹の藍子が犠牲になることは許せない。

（自分が盾になる。たとえ自分が死んでも・・・。）

父親の過去を知って、父の友人の過去を知って・・・月次は小学生とは思えない考え方を持っていた。

快斗は息子と娘を追って落ちて行った。

間に合うかどうかは分からなかったが、月次のハンググライダーで落下速度が落ち、なんとかなった。

「――っつ！」

快斗は月次と藍子を抱きしめた。

「月次、ハンググライダーをしまえ！」

「・・・う、うん。」

快斗は体の向きを思いっきり変えた。

仕方がない。

このままホテルに向かうつもりだった。

「さすが怪盗キッドさま！　快斗君が見事、わが子の命と、宝石を守りました！」

園子がテレビに向かって叫んだ。

安堵の表情があたりを包む。

「怪盗キッドを追えー！」

「な、中森警部！？」

突然の警部の発言に、部下たちは戸惑った。

さっきまで快斗や孫たちを必死に見つめ、いまかすかに安堵の表情を浮かべたばかりなのだ。

「そうよ、快斗を追って！」

警官隊が動き出した。

「おまえらもパトカーやヘリで追えぇぇぇぇ！」
中森警部のどなり声で、通信機は壊れかけた。
「絶対、ぜぇったいあのコソ泥を捕まえろ！」

「やっべー。」
快斗は藍子の耳についていた通信機越しに警部の指令を聞いた。
後ろからヘリやパトカーの音が迫ってきていた。
子供たちはぐっすり寝ている。
「2人抱えては無理！」

「ふん。これでキッドは・・・。」
「わたしをお忘れか？」
「あたしのことも。」
「ふぇえ？」

怪盗キッドとファントムレディは、何かを投げた。

「煙幕！？」

煙幕が消えると、怪盗キッドが一気に十体くらい飛んでいた。

「ダミー！？」

「追えぇぇぇ！」

捜査官が一斉に動く。

2人多いことも知らずに。

キッド争い６　休憩時間

「おい、起きろ。」

「んん？」

快斗はホテルの屋上に２人の子供たちを降ろし、起こした。

「ったく度胸があるんだかないんだか。２人しておねんねしちゃってさ。」

「ありがとう、父さん。助かったよ。」

「明日はゆっくり反省タイムだからな。いろいろ教えてやるよ。藍子も聞くか？」

「ぜったいや・・・聞く！」

「月次、ヤバいぞ―ォ！　中森警部がパワーアップしちゃうなー。」

「ふふん♪」

快斗は子供たちを連れて、そこにあったドアを開けた。

「ここからまっすぐ降りて、エレベーターで１０階の俺らの部屋、

分かるな？　そこで先に休んでろ。ほらカードキー。今日はもう遅いしな。２人で風呂にでも入ってゆっくり寝ろよ。明日は平次おじちゃんに大阪を案内してもらうんだからな。」

「「うん。」」

「ただの観光じゃないぜ。分かってるな月次？」

「ちょっとなによぉ！　お父さん、まさかキッドの仕掛けつけるんじゃ・・・・。」

「んなわけないだろ？　俺はまだ宝石返してないし・・・キッドは宝石返すまでキッドだからな。気をひきしめなきゃいけない。２人とも覚えとけ。」

「わかったよ・・・・・・ねえ、おなかすいたんだけど・・・なんか食べちゃだめ？」

「そういえば、藍子もおなかすいた。」

「おめーらお好み焼き・・・そっか。ロクに食えなかったんだよな。じゃあ・・・。」

快斗は白いスーツの奥、黒羽快斗お気に入りの服のポケットから財布（青子からのプレゼント。使いやすいが安物。）を探った。

と、同時にそのＩＱ４００の頭脳をフル回転し、ルームサービスの値段を思い出した。

「ほい、３０００円。これで軽めの飯食って早く寝ること、いいな。

そうそう、ルームサービスを頼むときは大人の声出したほうがなにかと楽だぜ。」

「こんな感じ？・・・ルームサービスヴぉ・・・。」

「ははっ、お前はまだ声がわりしてないからな。女の声のがラクだろ。」

「快斗ぉ！　降りてきなさぁああああい！」

「あ、青子！？　月次、そっくりだぜ、ビビったぁあ。」

「藍子だけど。」

快斗は急に不敵な笑みを浮かべた。

「ではわたくしはここで失礼します。」

快斗、いやキッドは柵にひらりと登り、笑いながら後ろに落ちて行った。

そしてハンググライダーで飛び去った。

「目指すは・・・さっきのビル。」

キッド争い7　延長戦（子供編）

「おい黒羽。」

月次と藍子が１０階に降り、キーを差し込んだとき、後ろから声がした。

「藍子、さき部屋に入ってろ。」

「えっ？」

「いいから・・・・・・何の用だ？　工藤、服部、白馬。」

「お前、無事やろな？」

「けがとか・・・してないよな？」

「Ａｒｅ　ｙｏｕ　ＯＫ？　大丈夫ですよね？」

月次は３人の顔をじっと見た。

てっきり捕まると思っていたのだ。
裏も何もない。純粋に親友を思いやる気持ちがそこにはあった。

「大丈夫・・・・・父さんに助けてもらえた。」
「でも、結局親父には勝てないんだよなぁ。」
「おれもや。剣道でも推理でも・・・。」
「Ｔｏｎｉｇｈｔ．　今夜もそうでした。」
「どういうこと？」
「いや俺たち・・・。」
「黒羽のオトン追っかけてきたんやけど・・・。」
「現れたのは月次くんと藍子さんだけ。」

沈黙がしばらく流れた。
「月次ぃぃぃ？」

「ああ？」

「お風呂空いたよ。あとルームサービスどうするの？」

「ちょっと待ってて。そうだ、一緒に食べないか？」

「俺と一葉はパスや。家に帰らなアカン。もうすぐオカン来るしな。」

「おれ、愛理呼んでくる。白馬、頼んどいて。たぶん黒羽に頼むと甘いものばっかりになりそうだから！」

「Ｉ　ａｇｒｅｅ　ｗｉｔｈ　ｙｏｕ．」

キッド争い８　延長戦（大人編）

快斗はあるビルの屋上に立った。

「キッドもう来ないのぉ？」

「けどすごいもの見れたな。」

「生で見たかったなぁ・・・。」

「まだ宝石返してないんでしょ、だったら戻ってくるかもじゃん？
まだいようよ！」

「俺らは先帰るわ。」

「ほーなん？　じゃあ・・・・・。」

「みなさーん！　もうキッドは来はりませーん！　はよう帰ってください！」

「もうすぐ通行止めも解除しますぅ。はよお帰りください！」

警察も群衆もわめいていた。

「誰が帰るか！　キッド来たらどうするんや！」

「そやそや！」

地上では群衆が騒ぎまわっている。快斗はほほ笑んだ。

「全員返してやるよ・・・。」

「当分帰れないな。」

「っ？」

快斗は振り返った。

新一、平次、探が立っていた。

「おめーらなんで？」

「宝石は月次君が持ってた。」

「けどお前はまだ返してへんやろ？」

「息子を命を張って助ける黒羽君が、息子に返しに行かせるとは考えられませんし。黒羽君は目立ちたがりですし。」

「で、張り込んでたら来たってわけ。」

「結構単純なんやなぁ。」

「ええ。それが黒羽君ですから。」

快斗は半ば覚悟した。

（捕まる・・・。）

だが、新一たち3人は動かなかった。

「今日は捕まえねーよ。」

「え？」

「あんたの奥はんにあないなこと言われたら・・・。」

「青子さんが言ってたんですよ。約束を守ってくれたから、今日は許す、と。」

快斗の脳裏に鮮やかにある風景が浮かび上がった。

あの夜、大阪の地図を前に青子とかわした軽口。

「月次と藍子を絶対に危険な目に合わせない。」

快斗は呟いた。

「俺たちも捕まえる気満々だったんだけどさ・・・。」

「さすが黒羽や。俺らもあないなことでけへんし・・・。」

「青子さんにああ言われてしまってはね。」

「返してこいよ、黒羽。」

「今は警備少ないで・・・なんでも野次馬が帰らんと、えらい難儀しとるらしゅうて。」

「すべて黒羽君のせいですよ。」

「あーわかったよ！　ではしばし・・・。」

「黒羽、あとで服部の家に来いよ！」

「・・・分かり・・・了解。」

キッドは快斗に戻り、再びキッドになった。

たちまちキッドコールが起こった。

キッド争い８　延長戦（大人編）（後書き）

大阪弁相変わらずですが、今日はますますひどい気が・・・。

キッド争い9　宴会

「じゃ・・・。」

「「「「「カンパーイ！」」」」」

グラスがぶつかりあい、ビールを飲み干す音がいっせいにした。

「おつかれー！」

「でも今回のキッドすごかったわねぇ。まさか黒羽君と月次君が出てくるなんて。」

「ほんと、すごかったわ・・・久しぶりに思いっきり人を蹴ったって感じ。園子の実況も結構評価されてたわよね。」

「ほんま、ルパンの不二子ちゃんみたいやったわ・・・ほらカリオストロの時の。」

「ええ。なかなか素晴らしかったわ。」

「動きすぎて、テレビ局から文句がいっぱい。でもいい映像が撮れたってとこ。」

「青子ちゃん・・・なんか今日静かじゃない？」

「ほんまや。やっぱキッド捕まえられなかったからなん？」

「まあね・・・今日は青子疲れたし・・・あんなことがあったから。」

「確かに、今日は大変だったよね。」

「月次君が落ちて行ったときはもうひやひや。実況のしようがなくて。」

「でも快斗がいてくれてよかった・・・・・・。」

「ぐどヴー！　ひゃぁっはっは！」

「黒羽、ふざけんな！」

「服部君。水か何かありますか？　バケツにでも入れて、ぶっかけないと。」

「そないなこと言うたって・・・掃除するこっちの身ぃにもなれ！」

「高木刑事、そこの窓開けてください。」

「へえ？　はい・・・ええと。」

「なわけないか。和葉ちゃん、ごめんね。家でこんなことして。」

「いいよ。どーせ子供たちはみんなホテルでおねんねやし。」

服部邸は、大人たちの宴会の場に使われ、大騒ぎだった。

子供たちはホテルのルームサービスとか、買いだめたお菓子類で我慢させている。

女子連中はまだ雑談しながら酒を飲む程度だったが、男連中は騒ぎに騒ぎ始めていた。

「はい、おつまみ。急いで作ったさかい、適当やけど・・・。」

「うわー！」

「おいしそう！」

「ああ、おばちゃん手伝いますぅ。」

和葉はあわてて立ちあがって、姑である静華からお盆を受け取ろうとした。

「ええのええの。和葉ちゃん、今日はえらい活躍したやろ？　うちの平次なんかさっさと逃げられてもうて。」

「けど・・・。」

「大丈夫やで。毛利はんに手伝ってもろてるのや。英理はんはさすがやなぁ。」

「なんなら、うちはここでいろいろやってます。」

「そやそや。ほんならここで。」

静華が出て行ったあと、蘭と園子は同時に顔を見合わせた。

「そういえば、和葉ちゃんおばさんのこと・・・おばさんて呼んでるの？」

「そうやで。小さいころから平次んとこのおばちゃんやもん。」

「そういえば青子も千影さんって呼んでるな。」

「あたしもだよ。新一のお母さんって呼んでるよ。」

「なかなか興味あるわね。」

女子連中はまたいろいろな話で盛り上がった。

議題はズバリ子供の教育。

志保が最近少し悩んでいるらしい。

「とりあえず日本の小学校に入れさせたんだけど・・・将来、海外で働くなら、海外のがいいかもしれないわ。」

「たしかに、賢くん英語ペラペラだしね。」

「けど、日本の学校でええんちゃう？　一平と一葉ホテルに送ってったとき、めっちゃ楽しそうやったで。」

「確かに。でもそこは志保ちゃんが考えるべきだと思うよ。」

「わたしは普通に育ってほしいのよ・・・もうこんな話やめましょう。それよりも、一平君やコナン君、すごいらしいわね。西の服部東の工藤三代目って海外でも評判だって、探が言ってたわ。」

「けど、それでこの間も事件に巻き込まれてなぁ。犯人につかまって大騒ぎやったんよ。あたしと平次も銃にはかなわんくて。お父さんたちが来てくれなかったら大変なことになっとったわぁ。あとでこってりしぼったけどな。平次と一平に、『うちら警察に任せぇ！』ってどなった時は気持ちよかったで。」

「そうだったんだ・・・うちのコナンもこの間お父さんを麻酔銃で寝かして推理したの。ほんと新一そっくりで呆れちゃったわ。」

「賢も一緒。」

「白馬君って、最近『調書一つで解決する名探偵』として有名だよねえ。うちの旦那が海外遠征行った時、知り合いだって言ったらそれだけで大騒ぎになったらしいのよ。」

「ええ。世界中飛び回ってるから現場にゆっくり行く時間がないらしくてね。それで写真や文章に頼らざるを得ないらしいわ。わたしが現場に行って調べることもあるのよ・・・そういえば京極さん、海外に遠征したって聞いたけど。」

「防衛戦。勝ったの！　で、帰ってきたらキッドへの挑戦状ってわけ。」

「友子ちゃんと愛理ちゃんも空手すごいんやって？」

「一葉ちゃんの合気道もすごいじゃない。」

「そういえば青子、一平君が大会で勝ったってニュースで聞いたよ。」

「そうなん？　そういえば勝ってたわ。そんなことより、コナン君のサッカーや。臨時でサッカーチームのレギュラーになって、弱小チームを優勝に導いたんやって？」

「でも本人はやる気０。新一と同じ。」

「でも一番は、今日の月次君と藍子ちゃん。やるじゃない。」

「でも、まさかキッド３人にファントムレディまで来るなんて。あのロケット、よっぽどなのね。」

「だれか、あたしのこと呼んだ？」
「千影さん！？」
「はぁーい♪」
「新一のお母さん！？」
「蘭ちゃん見てみて、この写メ。英理ちゃんと小五郎君のラブラブショットよん。」
「さすが千影はんや。あの２人、喧嘩してはったんやけどなぁ。」
「ちょっと有希ちゃん！？」
「きゃあ、大変っ！　千影ちゃん？　ヘルプヘルプ！」
「さあ千影さん。今すぐその携帯を差し出しなさい！」
「怪盗から奪うなんて十年早いわよ、毛利英理さん？」
「名誉棄損で訴えますよ？」
「さすが弁護士はんやなぁ。」
「ちょっとお母さん、なにしてるの！？」
「蘭、子供は引っ込んでなさい！」

こうして大人げない宴会が朝まで続き・・・？

大阪見物は取りやめになったという。

陰謀と法廷　1かかる圧力、制限される捜査

妃法律事務所は緊迫した空気に包まれていた。

無理もない。

英理、蘭親子は、ある人物との戦いの準備にあけくれていた。

九条検察官との法廷での戦い。

少し前に起こった連続殺人事件。

東京に住む老夫婦と、大阪に仕事で滞在していた息子が殺された。

かなり残忍な殺されかたで、息子の妻、金崎まどかが倒れかかったくらいだ。

警察の捜査の結果、犯人として大沢義光という男が捕まった。彼はこの老夫婦の近所に住んでおり、トラブルを起こしてた。彼にはアリバイがなかった。

本人は強く否定し、自白もしなかったが、彼の指紋のついた遺留品も見つかった。（本人は強く否定している。）

何よりも一番は、殺された老人が残した謎の文字。

残忍な殺され方にも関わらず、意外と雑な殺され方で、息絶えるまで数分間があったらしい。

血で大沢と漢字で書かれ、その上にバツ印のようなものがついていた。

次に大とだけ書かれ、またあわてたようなバツ印。

このダイイングメッセージが決め手となり、彼は逮捕、起訴された。

だが、いくらか不可解な面も多く、捜査を担当した警視庁や大阪府警からも疑問の声が上がっていた。

服部家では逮捕されたその夜から家でもう一度捜査を振りかえり、各自暇を見つけては調査しているらしい。

白馬家でも、海外で活躍した経験のある探の意見、科学者としての志保の意見、そして白馬警視総監も疑問視しており、捜査のやり直しも考えているらしい。

黒羽家でも、不可解さが話題になった程。

工藤家でも毛利探偵事務所でも、ロスでも散々話し合った。

もちろんマスコミも不可解さを次々と放送し、各方面から疑問の声

が上がっていた。

だが検察側は起訴。担当を九条検察官にするほど気合が入っている。

彼らは自信満々だとのこと。

対する弁護側は、大沢義光の妻、大沢秀実が雇った敏腕弁護士。

毛利（旧姓妃）英理と、工藤（旧姓毛利）蘭。

「お母さん・・・どうしよう。これじゃあ死刑になっちゃうよ・・・。」

蘭は母の事務所で資料をバタンと閉じた。

「大沢さん、無罪かもしれないのに・・・。無罪なのに・・・。」

「しかたないわ。証拠がああもそろってしまうとね。せめて無期懲役にでも持ち込んですぐに再審を要求すれば・・・それか三審制を利用して高等裁判所か最高裁に持ち込むことも可能ね。けれど、蘭。まだ分からないのよ・・・・・なぜ九条検察官も検察側も、あんなに自信があるのかしら。すこしでも脳が働けば、証拠とダイイングメッセージとアリバイ以外はすべて不可解なままだということがわかるのに。九条検察官もなぜ・・・。」

「でもお母さん。アリバイもダイイングメッセージも、指紋の着いた証拠品も、決定的すぎるよ。」

「とにかく、なぜ検察があんなに自信満々なのか調べる必要があるわ。それに本当に無罪なら決定的な証拠があるはず。」

「わかったわ。」

そのとき、電話が鳴った。

「お母さん、出るね。・・・はい、妃法律事務所です。」

「もしもし、栗山です。」

「栗山さん、公判どうでした?」

「ああ蘭さん。なんとか勝利にこぎつけたってところ。」

彼女は今でも妃法律事務所所属の身だが、最近では1人で事件を担当することも多い。今ではクイーンの秘書、すご腕弁護士として知られていて、その美貌と英理から学んだその能力から「法曹界のセクレタリー」と呼ばれている。

「妃・・・毛利先生いらっしゃる?」

「ええ。今母に変わります。お母さん、栗山さん。」

「ありがとう蘭・・・栗山さん？　公判どうだった？」

「なんとか勝利しました。英理さんに教わったことがかなり役に立ちましたよ。」

「よかったわ。おめでとう。」

「それよりも・・・この間頼まれたこと、いろいろ聞いてきました。すこし情報が集まりました。弁護士仲間や同級生の検察官に聞きまわって・・・。」

「詳しく教えて。」

「はい。まず多くの弁護士が証拠に疑問を持っているそうです。とくにダイイングメッセージ・・・あの×の意味がやはり不可解で。」

「そう・・・他にはなにか聞けたかしら？」

「あまり聞けなかったんですが・・・大学の同級生で検察に入った子に会えました。彼女が言うには・・・これはあくまで極秘の話だそうで、あまりはっきりした答えじゃないのですが・・・その・・・。」

「いいわ、構わず教えてちょうだい。」

「はい・・・・・・彼女は検察はなにか重大な証拠があったと。もちろん詳しくは・・・あと、九条検察官について。彼女、最初は断

ったらしいんです。この事件の担当を・・・結局担当することになったらしいですけど。」

「最初は断った？　彼女が？」

「断ったらしいですけどほぼ強引に・・・らしいです。」

「そう・・・ありがとう栗山さん。お昼まだよね？」

「はい。でもこっちで食べてきます。」

「よかったら一緒にどう？　腕によりかけて、おいしいお昼を作るわ。」

「えっ、いやあの・・・その・・・。」

「なんか今日、元気ないわね。」

「いやあの・・・。」

「栗山さん！　わたしも手伝います！」

蘭はとっさに機転を利かせた。

「では、なるべく早く帰ってきます。」

その夜、和葉は遅くまで大阪府警に残り、資料とにらめっこしていた。

「和葉ちゃん？」

「大滝警部。おつかれさまです。」

「おつかれ・・・和葉ちゃん、残業なんか？」

「いやちゃいますぅ。けど調べたいことがあって。先帰っててください。電気とかうちが確認してきます。」

「せやけどもう遅いで。一平君と一葉ちゃん、えらい待っとるんやないか？」

「平次んとこのおばちゃんがいるさかい、大丈夫です。ほ・・・平蔵さんも帰らはったし、平次もいてるし・・・。」

「けど・・・あんまり公には・・・。」

「頼まれたさかい、しっかり調べな。」

「頼まれた？　誰に？」

「平次と一平と平蔵さんと・・・あと蘭ちゃんにも。」

「毛利探偵の娘さんの？」

「へえ。弁護士さんやからいろいろ必要なんやろ？」

「わかったで、和葉ちゃん。あまり遅うならんようになぁ。」

「わかってます。ほなうちはここで。」

和葉はまた資料をめくった。

携帯の電源も切る。

受験の時、集中するために電源を切って以来、本当に集中しなければいけない時は携帯の電源を切る癖ができていた。

コンコン！

ドアが鳴った。

「はい？」（上司様のだれかや。きっつう怒られるわー。）

「和葉？」

「へぇ？　平次？」

「へぇ・・・やないやろ？　ったく携帯の電源も切りやがって・・・大滝はんに聞いてびっくりしたでぇ。迎えきたんや。はよ支度せぇ。」

「はぁ？」

「・・・オカンに言われたんや。『和葉ちゃんに働かせてどうすんのや？　あんた探偵なんやろ？』言われてな。」

「ふうん。けど資料・・・。」

「持って帰ればええ。」

プルルルル・・・

快斗はマジックの練習をやめて携帯をとった。

「もしもーし。」

「もしもし？　俺。工藤だけど。」

「工藤？　ひさしぶりだな。」

「夜遅くすまないな。ちょっと協力してもらいたくて。」

「いいけど、手短に済ませてくれ、工藤。今日は中森警部が遊びに来てて・・・岳父と敵対してると、何かと大変なんだ、ぜっ！」

「それはこっちも同じだよ。おっちゃんと同業っつうのはなかなか骨が折れる。服部もびくびくだって前言ってたし、白馬なんかたまに実験につきあわされるってさ。要するにどこも一緒、お前だけじゃないってわけ。」

「だから早く！」

『んん？　工藤君から電話か？　相変わらずだな。』

『ほんと。青子もたまに呆れてるんだよ。何だろう？　やっぱりあの事件かな？　この間和葉ちゃんとも話したんだけど・・・。』

「ほら！　まあいいや。頼みって？」

「ああ、青子ちゃんに伝えてくれないか？　蘭が資料をほしがってる。」

「蘭ちゃんじゃなくておめーだろ？」

「どっちでもいい。それと、おめーも調査してくれないか？」

「はあ？」

「実は・・・俺ら、蘭や妃弁護士、栗山弁護士も、大阪の服部や和葉ちゃんも、白馬も・・・子供たちも父さんたちもしつこく調べす

ぎて、警戒されちゃってさ。ちょっと公に調べられなくなっちまったんだ。特に被害者の家や現場のあたり。もう立ち入り禁止ってかんじで。だからお前に代わりに探ってもらおうと思って・・・頼む！」

「いやだ。ってか無理だろ。双子かってくらいそっくりなんだし。」

「そこはおめーの変装で。何とか頼む。」

「俺マジックショーがあって・・・。」

「蘭の気持ちにもなってくれよ。あいつ・・・『法曹界のエンジェル』とか『無実の者を守り通すプリンセス』とか変な肩書き付けられてあせってんだ。それであの大沢ってやつについて必死になってて。母さんも妃弁護士も心配してるんだ。あいつのあの性格だからさ、大沢さんを信じて必死に証拠探してるんだけど、不利になるばかり。あいつそれでも調べて・・・裏があるらしいことを突き止めたんだ。そんな矢先に締め出されて、あせってるんだよ、もうそれこそ必死に・・・。」

「・・・わかった。ただマジックショーがあるのは事実だからな。俺はお前らと違って探したり、追いかけたり、探ったりするのが本業じゃない。隠したり、逃げたり、だましたりするのが本業だ。それがマジシャンって仕事なんだよ。そんな毎日は張りこめないけど・・・なるべく探りを入れてみる。実は青子もそう言ってたんだ。あの事件はおかしいって。」

「そうか・・・。」

「ああ。青子と警部の話じゃあ、何でも高木刑事と佐藤刑事・・・

おっと、結婚したか。とにかくあの2人がもう一度調べ直したいって上に言ったらしい。目暮警部や松本監理官はもちろん、小田切さんや白馬の親父さんまで許可したらしいんだけど、そのさらに上から圧力がかかったらしい。だから警察官も公に調べにくくなったってわけだ。大阪府警も似たようなもんで、和葉ちゃんや服部の親父さんも苦労してるみたいだぜ。青子は課が違うから、いろんなとこからいろいろ頼まれてるってわけ。」

「俺たち探偵も、あっちこっちから圧力がかかってるんだ。本当にお前が頼りだよ。サンキューな。へまはするなよ。」

「怪盗キッド様がへまするかよ。」

「してるよな、よく。ポーカーフェイスでだましてるけど。」

「工藤、あんにゃろ・・・。」

陰謀と法廷　1かかる圧力、制限される捜査（後書き）

受験終わったので、たっぷり投稿させていただきます。

陰謀と法廷　2忍び寄る悪の手

おはよー。」

帝丹小学校のいつも通りの朝。

「おはよー、愛理。」

「友子！　先来てたんだね。」

「うん、今日はお母さん、ちょっと忙しいみたいで。」

「じゃあ、あたしと一緒だね。」

「裁判大変だもんね。コナン君、大変でしょ？」

「そうそう、朝からぐちゃぐちゃ。」

「1＋1＝？」

「2！」

そんな授業中、愛理たちの隣のクラス、コナンのクラスでは、いきなり携帯が鳴った。

ピピピピピ・・・

「だれだよぉ！」

「いーけないんだ、いけないんだ！」

「せーんせいに言っちゃうぞ！」

「ばーか。先生もいるぞ！」

「とにかくみんな静かにして！　携帯誰？　早く止めて。ここは学校よ。」

携帯をあわててとったのはコナンだった。

「ったく・・・服部？」

「もしもし？」

「もーしもーし！？　工藤か？」

「何だよ。今忙しいって言うか、授業中なんだけどな。」

「こっちもや。それよりヤバいことになってんのや！」

「何だよ？　ヤバいことって。」

「警察がわんさか来たんや。」

「何で？」

「簡単や。俺らの学校に殺し屋が来たからや。」

「はぁ？」

「安心せい。ど素人はんやったし、警察がすぐ来たさかい、なーんも起こらんかった。けどこれで確実やな。」

「ああ、俺たちが・・・。」

「「何者かに圧力をかけられていること。」」

「たぶん、俺ら子供に手ぇ出せば、親も黙ると思ったんやろな。親父もじっちゃんもオカンも、即起訴してやろと思うたそうやけど・・・結局不起訴や。上から圧力がかかったらしいで。せやから・・・俺ら今日学校が終わり次第、東京に行く。資料を持ってな。さっき親父から伝言もらったんやけど、この事件、大きっな何かどえらいもんがあるみたいなんや。」

「了解。こっちも気をつけるから。」

「黒羽にも連絡入れるわ・・・気いつけてな。」

組織のメンバー

かつてウォッカと呼ばれていた男は、看守に呼ばれ、面会室に連れていかれた。

面会室にいたのは、エレーナだった。

黒の組織のメンバーは、本当に大勢いて、重い刑の者から不起訴処分の者まで、受けた刑は様々だった。

そして、社会の冷たい目にさらされたのである。

いつの間にか、元組織のメンバーは、トップの妻で不起訴だった宮野エレーナの元で協力するようになったのだ。最初は問題視されたが、今はそうでもない。

「少しやつれたんじゃなあい？」

「いえ。エレーナさんこそ。」

そんなやりとりが続く。世間話や仲間の噂、近況報告、たわいない話だ。

「ところでウォッカ、これに見覚えがないかしら？」

「これは・・・。」

「組織の本部跡で見つかったの。本物ね？」

「まちがいありやせん。アニキの・・・ジンの手記です。」

組織のメンバー　シェリー編　マウスの命

「また失敗か・・・。」

無残にも息絶えた幾匹ものマウスを前に、志保は呟いた。

組織に命じられて大学卒業後、まだ１０代半ばにも関わらず、不老不死の薬や若返りの薬の研究をしてどれくらいだろうか。志保にもあまり詳しくは思い出せない。大学に行く前も、幼い時も、アメリカにいる時も、いつも研究していたのだけは覚えている。

幼いころは、死んだマウスたちがかわいそうで、いつも泣いていたが、もう慣れた。

それに、事故死した両親や仲間たち、組織のボスを含む大勢の人間の命を救うための犠牲だと思えば、まだ気が楽だ。

だが、かわいそうだと思う気持ちだけは、罪悪感だけは変わらない。

実験結果を記録し、マウスの細胞を採取した。それから大きく伸びをすると、死んだマウスを、小さな紙にくるんだ。

手袋をして何かの液体のしみ込んだ紙をそっとマウスにあてる。ジュ―というかすかな音がした。組織の証拠を消すため、強力な酸性の液体でマウスを溶かす。紙もゆっくり溶けていく。手袋もアルカリ性でなければとっくに溶けるはずだ。

マウスの体が小さくなるのがわかると、すばやくアルカリ性の紙をとって、マウスの体をくるんだ。

同じ作業を何度も繰り返す。

心の中で、罪悪感を感じながら、志保はそれを繰り返す。

とむらいの言葉は、志保の心の中でしか響かない。

本当なら、火に投げ込めばいいだけの話だが、志保はそれを嫌がった。

最後の一匹が終わった時、志保は大きな紙をとった。

マウスをすべてくるむと、地下から外に出る。

日の光のなか、志保はマウスを小さな穴に入れた。

小さく祈って、すぐに土をかける。

すべて無言の作業だった。

マウスのことは忘れなければならない。

志保は研究を続けようとした。マウスのためにも・・・。

だが、生きているマウスはもういなかった。

助手に頼もうとしたが、助手はいなかった。

志保は、腰を上げた。

ほかの研究員からマウスとそのマウスのデータを借りるつもりだったのだ。

佐藤と高木　休日の資料探し

「ちょっとーぉ高木君！　見つかった？」

「そんな・・・まだ見つかってませんよ！」

高木刑事、いや高木警部は古い資料の山を探った。

「お父さん、手伝おうか？」

「ああ、流。ありがとな。」

高木刑事と佐藤刑事は結婚。２人の子供にも恵まれた。

１人目は、佐藤刑事そっくりの男勝りな女の子。美優子と名付けられた。

２人目は、高木刑事そっくりの苦労人タイプの男の子。流と名付けられた。

高木刑事と佐藤刑事もその後昇格して警部になった。

２人とも今も捜査一課に勤めている。時には美優子や流も付いてきて、未来の刑事としてさまざまなことを吸収している。

この２人はコナンや愛理たちより年上の小学校高学年で、子供たち

を見ているともうミニチュアの世界を見ているようなのだ。

今日は久しぶりの2人そろっての休暇で、お互いごろごろ（佐藤警部の母には不評だが。）楽しんでいた。

が、何を思ったのか・・・。佐藤警部の気まぐれで、古い資料探しとなってしまった。

資料の山は、高木と佐藤がまだ付き合っていたころのものだった。

懐かしい事件の資料や懐かしい文字が見え隠れする。

いつの間にか美優子も来ていた。

「ねえお父さん、これ・・・何？」

美優子はふとあるファイルを拾い上げた。

タイトルもなく、だが厚いファイル。

「懐かしいわね、そのファイル。」

佐藤警部はファイルを見つめた。

「覚えてる？」

「ええ、佐藤さんと死ぬ気で調べましたから・・・。」

「またぁ！　いつまで敬語使うの？　もう夫婦でしょ？」

「いやでも上司ですし・・・・・覚えてますよ。そのファイル・・・。」

「佐藤さん。」

「あらなあに？　高木君。」

「その・・・報告書書きましたので。訂正や付け足しがありましたら・・・。」

「・・・そうね。」

「やっぱり・・・先に帰ったほうがよかったんじゃないですか？松田刑事のこともありますし・・・。」

「平気平気。気にしないで。」

佐藤刑事はそう無理に笑って報告書の分厚い束を取り上げた。一番上に付箋が張ってあった。

やはり調べませんか？

「高木君・・・。」

「前話してたじゃないですか・・・コナン君のこと。やっぱり調べましょう。今日・・・彼と閉じ込められて、ぞっとしたんです。普通の小学生じゃない。小学生が・・・どんなに大人びた子でも・・・自分の正体を聞かれて『教えてあげるよ・・・あの世でね・・・。』なんて言いません。やっぱり佐藤さんの推理が当たってるのでは？」

「正体・・・ね？　勤務時間外しか調べられないし、下手にすれば

命も仕事も危ないけど・・・・。」

「やりましょう・・・・。」

その日から、2人は勤務時間の間を縫って調べ始めたのだ。

「江戸川コナン」について。

まずは、事件のたびに顔を出すコナンをよく観察した。

「高木君・・・・。」

「佐藤さん?」

「やっぱり・・・・彼なにか隠しているわ。」

「ああ、あの容疑者ですか?　たしかに・・・・。」

「違うわ。コナン君よ。見てあの動き・・・・捜査のプロよ。」

事件は解決し、2人も帰宅時間となった。

「高木君。彼の御両親に会ってみたいの。コナン君の・・・。案外警察官や探偵、ミステリーマニアでってこともあるだろうし。あんなに頭がいいのも、御両親の影響が強いかも・・・ね？」

かなりあっている。（世界的推理小説家だから。）佐藤刑事恐るべし。

「そういえば、工藤君の親戚だか何だか言ってましたねぇ。案外工藤君から直々教わってるのかも。」

「明日わたし非番だから。戸籍でも調べてみようかしら。」

「戸籍？　佐藤さんそれはちょっと・・・。」

「警察手帳見せればいいわ・・・捜査だし・・・。」

数日後の昼食。

捜査の合間を縫って、ファミレスで食事をした2人。

最初は今追っている事件の犯人や証拠やアリバイで盛り上がったが、なんとなく会話が途絶えてしまった。

「そういえば・・・コナン君のこと・・・なんだけど。」

「何か分かったんですか？」

「それが・・・ないの。彼の戸籍が！」

「戸籍がない！？」

「ええ。米花町の役場でも調べたし、工藤君の周辺の人たちのも調べたんだけど・・・ないの、彼の戸籍が！」

「そんな・・・。」

「どこか別にあるのかしら？　外国とか。でもひっかかるわ。」

「阿笠博士に聞いてみませんか？　いろいろ詳しいですし。」

「そうね。」

プルルルル・・・

「はい阿笠です。」

「阿笠さんですか？　警視庁の佐藤です。」

「おお、佐藤刑事。」

「聞きたいことがあって・・・コナン君のことなんですが・・・。」

「彼は今学校じゃよ。哀君は今日は遅くなりそうだといっとったしのう。」

「彼の両親についてです。ちょっと知らせておきたいことがあって。」

「彼は今毛利君の家におるし、忘れ物や・・・。」

「先日のように、彼が事件に巻き込まれ、命が危うくなる可能性もありますし・・・一応お伝えしようと思って。」

「彼の両親は今海外におって、忙しくて連絡が取りにくいんじゃが・・・。」

「そうですか・・・ところで、コナン君の御両親って、どんな方なんですか？」

「いやぁわしもよく知らなくて・・・。」

「きっとミステリーが好きなんでしょうね。」

「そうそう、大のミステリーマニアでのう。コナン君も2人の影響を受けているはずじゃ。」

結局詳しいことは聞けない。

コナンも、両親についてはあまり詳しく話してくれない。

新一のほうも、さりげなく聞いてみたが「知らない。」そうだ。

高木は、来葉峠の焼死体について、ジョディからコナンの携帯を借り、調べた。

焼死体との照合と共に、高木刑事はあの指紋の中に、警察関係者がいないか調べるつもりだった。

もしかしたら、警察のデータベースにのこっている可能性もある。

あの焼死体の正体は、まだわかっていなかった。

「やばっ、ミスった。コナン君の指紋照合・・・えっ？」

間違えてコナンの指紋と、警視庁のデータを照合してしまった。

ほんの軽いミスだった。

が、結果は軽くなかった。

江戸川コナンと工藤新一の指紋がほぼ一致したのだ。

「な、なぜ・・・。」

親戚だからだろうか。指紋も遺伝するという話を聞いたことがある。

だが、そんなことがあるだろうか？

大きさ以外はほぼ同一人物のものなのだ。

「ジョディ先生の指紋もまさか・・・何か関係あるのでは？」

照合のボタンをクリックする。

かつて誘拐事件で押収された拳銃の指紋と一致した。

「どんな事件・・・コナン君や哀ちゃんの！？」

ジョディがＦＢＩで拳銃を持っていたり、犯人が持っていたりする

可能性はあるが・・・。

高木はほかの指紋が誰かと一致しないかどうかを調べた。

「一致するわけないか・・・。」

が、一つだけ一致した。焼死体のものでもない、コナンやジョディのものでもない、全く別人の指紋と・・・。

「誰の指紋だろうか？　ＦＢＩのだれかの指紋か？」

警視庁内のデータを調べたが、さすがにＦＢＩの指紋との照合はできそうになかった。

拳銃には、他にも指紋があり、それを調べると・・・昔、犯罪で使われたと思われる銃の遺留品の指紋と一致した。

「いったい・・・？」

これ以上調べては後戻りができない気がした。

なにかとてつもなく大きな事件と関わっているような気がして・・・。

だが、警察官として、捜査一課の一員として、調べたかった。

真実を・・・。

もっと調べたいという気持ちが勝った。
コナンの携帯は手元に置いておくことにした。

「なつかしいな。けど結局つかめなかったんだっけ？」
「ええ。どうしても小学生と高校生がつながらなくて。」
「まさか幼児化したなんて考えられなかったのよね・・・。」
「そういえば探し物は？」
「ああ。大丈夫。やっぱいらないかも。そうだ、さっき開けたんだ

けど・・・食う？」

佐藤警部は、チョコレートを差し出した。

「あっはい！　今日はバレンタインじゃないですよね？」

「そんなわけないじゃない！！　今何月だと思ってるの！？」

「お母さん、またそれ言った～！」

「お父さんも～！」

「「ヒューヒュー！」」

「こっこら！」

「やめなさいって！」

新たな由美さんの誕生、のようだ。

組織のメンバー　シェリー編　マヒカの遺志

志保は研究室の外へ出た。

2，3階上の研究室に、毒薬と解毒薬の研究をしている部門があったはずだ。そっちには実験用のマウスが大量に飼育されており、処理に困っているというううわさを聞いたことがあった。意味もなく毒を飲ませることもあるという。それくらいなら、どこかが貸してくれるかもしれない。

「こんばんはシェリー。」

「こんばんは。」

顔見知りの女研究員、マヒカが声をかけてきた。

彼女は志保よりも年上。おもに栄養剤など、世間にだし、カムフラージュするための薬を開発していた。彼女のビタミン剤は効果てきめんで、志保もなんどかお世話になっている。気さくでサッパリした性格で、とても組織の人間とは思えなかった。彼女も、組織はただ単に薬を開発する組織くらいにしかおもっていないのだろう。確かに、組織はその人間に必要な情報くらいしか教えない。マヒカが知っているのは、せいぜい時には毒薬を作るくらいということくらいだろう。

それにしても、彼女は本当に明るかった。そして前向きだった。

「なんかやつれたんじゃない？」

「大丈夫。またあなたのスペシャルビタミンに頼るわ。」
「新作があるの。安全よ。試してみる？」
「今度お願い。」
「オーケー。あとで持っていくわ。」
「相変わらず、あなた元気ね？」
志保は半分冷やかして言った。
「そう？　普通よ普通。あなたが疲れすぎなの！　そういえばシェリー、あなたの研究はどう？」
「また失敗したわ。マウスもなくなっちゃったし・・・これから借りに行くところ。」
「そんなの、助手さんにでも頼んだらどう？」
「その助手がいなかったのよ・・・。まあ外に出たい気分だったし。」
「そうそう。気分転換は大切よっ！　そんなことより、シェリー。あなた何の研究をしてるの？」
「・・・。」
「遠慮しないで教えなさいよ。仲間でしょ？　あなたが開発したっ

て薬にお目にかかったこと、まだないのよ。」

「若返りや不老不死って言えば分かる？」

「何それ？　冗談でも言ってるつもり？　いくらシェリーでもそんな研究、何十年もかかるでしょ？」

「ええ。」

「じゃあゆっくりゆっくり。いそいじゃダメ。」

「そうね。」

「でも意外だわ。まさかシェリーが・・・。まあ変な組織だし、仕方ないか。いい研究所だとは思うけれど、なんか変よね？　お酒の名前で呼び合ったり、黒っぽい服の人がよく来るし。シェリーのことも何にも教えてくれないのよ。」

「そうね。にしては元気よね、マヒカ。」

「何でかわかる？」

「分からないわ。いいことでもあったの？」

「妹から手紙が来たの。久しぶりで短かったけれど。姪の写真もあってね・・・とってもかわいいのよ。あと2，3年で小学生よ。最近会ってないもの・・・。なぜか休みが取れなくて。でも今度会いに行くわ。」

「会えるといいわね。とってもいい笑顔・・・カチューシャも似合

ってるわ。」

「ありがとう。たくさん写真があるわ。一枚あげましょうか？」

「いいの？　ありがとう。もう行かなきゃ・・・。」

「あとでね・・・。」

志保は日誌をめくりながらその写真を見つめた。

かつて灰原哀として暮らしたころの写真の横に並べてみる。

かつて組織にいたころ、アポトキシンについての日誌が日記だった。

日誌に挟んだ写真は鮮やかだった。

写真の少女は、歩美だった。

「マヒカ・・・歩美ちゃんのおばさんだったのね。どうりで明るくて・・・前向きなわけだわ・・・。」

マヒカは、逮捕された組織の研究員のリストにも、構成員リストにも、かつての志保のようにとらえられていたもののなかにも名前すらなかった。

志保はあの後、何度も調べた。

マヒカは死んでいた。

事故死と言うことになっていたが、ビタミン剤で人が死ぬわけはない。マヒカの同僚の話では、彼女はだんだん組織に逆らうようになったという。労働組合とか待遇改善とか叫んで・・・。

組織の邪魔になり、組織の真実を知り・・・。

殺されたというのが、志保の出した結論だった。

あの日の思い出が鮮やかに、本当に鮮やかに思い出された。

マヒカの笑顔も、マヒカの声も。

マヒカの写真は一枚だけある。

いつか、高校生の歩美に渡すつもりだ。

歩美はマヒカのこと、叔母のことを知らないだろう。歩美の母親もあまり気にもとめなかったにちがいない。いや、マヒカが2人を守るため、気にもとめさせなかったのだろう。

歩美は彼女のことをどう思うだろうか？

探偵クラブとして、少年探偵団として、嫌がるだろうか。戸惑うだろうか。

そうであってほしくはない。

マヒカのことを・・・マヒカの明るさを、前向きさを・・・。

そして組織と戦った人であることを誇りに思ってほしい。

志保はスケジュールを確認する。

明日にでも、警視庁に顔を出すつもりだ。

そこには、高校生探偵団の一員、キュートな女探偵、歩美がいるはずだから。

陰謀と法廷　3大阪組上京

「ったく何で俺らが迎えに行かなきゃいけないんだよ・・・。」

月次がトランプ銃をくるくる回しながら言った。

「仕方がないじゃありませんか。大人はみんな忙しいらしいですし。」

と賢。どこの誰に似たのか、とにかくクールだった。

「にしても服部たち、遅くないか？」

と、コナン。

「確かにそうだよね。」

「何かあったんでしょうか？」

「うな重の食べすぎで腹壊したんじゃないのか？」

「まさか、元太君じゃないし。」

「そうですよ～。」

コナンと月次と賢、あと少年探偵団（現帝丹高校探偵クラブ）の3人が駅で平次たち大阪組の一行を待っていた。

学校にまで妨害が来た中、危ないだろうと平次たちは断ったのだが、

結局迎えに来たのである。

「けど・・・遅いよやっぱり！」

「確かにそうですけど・・・。」

「あの色黒！　なにしてんだ！？」

「誰が色黒男や、工藤。」

「平次、コナン君やで。いつもゴメンなーコナン君。」

「いやー、こいつ工藤にめっちゃそっくりで・・・。」

「はあ？」

「まあええわ。コナン君？　年上を敬わなアカンで。」

「平次おじさんのことじゃなくて、一平のほう。」

「おじさんかいな・・・。」

「ははっ、一平のこと色黒男やって。ほんまやなぁ、おかあさん。」

「ほんまやね。探偵クラブのみんなもええ子にしてた？」

「うん、和葉お姉さん。本当は蘭お姉さんも来たがってたんだけど・・・。」

「事件の捜査が忙しくて来れなかったんです。」

「しゃあないやろ？　蘭ちゃんは弁護士さんやし、青子ちゃんも刑事さんやし。志保ちゃんは今日本にいてるん？」

「うん！」

「うれしいわー。うちは警視庁に顔ださなアカンけど、ついてくる？」

「「「うん！」」」

「でも、コナン達、狙われてるんだろ？」

「そうだね。」

「やっぱりいいです。」

「ええよ。あっちには平次がいてるし。」

「じゃあ・・・。」

和葉たちは警視庁に行き、平次たちと荷物は新一の家に向かった。

陰謀と法廷　４夕食の準備

「おじゃましまーす！」

和葉は警視庁から帰り、工藤邸に入った。

平次、和葉、一平、一葉たち服部家は、当分工藤邸で過ごすことになった。

「おいおばはん、遅いで。」

「何や一平。ああ、蘭ちゃん、いろいろゴメンな。ホテルに泊まってもよかったんやけど・・・。」

「ううん。賑やかでありがたいくらい。最近物騒だし、この家大きくて、使っていない部屋も多くて、ちょうど困ってたとこなの。」

「ほんならうちといっしょやね。でもご飯とか大変やろ？」

「平気平気。いい助っ人も来てくれたし・・・さあさあ、上がって。」

「おじゃましまーす！」

「和葉ちゃんと服部君の部屋はこっちね。もう荷物は運んであるの。中のクローゼットとか机の引き出しとか、遠慮なく使って。」

「ありがとう。」

「じゃあ・・・。」

「おかーさーん！　焦げちゃうよぉ！」

「はーい！　ごめんね和葉ちゃん。」

「ええよ、蘭ちゃん。」

「あら、蘭ちゃんに和葉ちゃん。どうかしたの？」

「ああ、新一のお母さん！」

「もしかして、忙しくて困ってる感じ！？」

「ええ、まあ。」

「オーケー。じゃあ、わたしが案内しちゃうわ。」

「「お願いします！」」

「はいはい。まずここをまっすぐ行ったらリビング、こっちが書斎。トイレはあっち。お風呂もね。階段上がった上が寝室。こっちに行くと新一と蘭ちゃんの事務所。さあ、2階行くわよ。」

「へえ。」

「まずここらへんがお客様用のお部屋。いくつもあるから、間違え

ないようにね。和葉ちゃん達の部屋は・・・。」

「ここや、ここ。和葉、遅かったな。」

「平次！？」

「はよせい、荷物とかよう分からんくてな。おい工藤！　これ、どこにしまえばええ？」

「さあ。春物のコートだろ？　もうそろそろ使わなくなるんじゃないのか？」

「いやーまだ使うかもしれへん。」

「まっ、どっちでもいいだろ。」

「ちょっと待ちぃ。」

和葉はぎろりとにらんだ。

背中に炎をしょっていた。

「あんた、あたしの荷物まで手ぇつけた？」

「そらあ、やっといてやろー思うて。」

「はあ？　工藤君にまで手伝わせて！？」

「工藤はついでやつ・い・で。資料持ってきてくれたんや。」

「じゃあ服部・・・俺はこの辺で・・・。」

「ちょっと待ちぃ、工藤君。平次の奴、何を手伝わせた？」

「えっと、荷物をクローゼットの中に簡単にしまう作業を・・・。」

「何でや？　平次！」

「ほらその・・・まあこれからちょくちょく東京で調査するし、荷物はここにあずけたまんまでええって工藤が言うてたし・・・。」

「で、何をどこにしまったんや！？」

「ええと、スーツはそこにかけて・・・。」

「喪服ももってきたで。それはそこの引き出し・・・。」

「ズボンはその下の棚で・・・。」

「靴下はそこの引き出し・・・。」

「・・・。」

「・・・。」

「全部、片つけてくれはったん？」

「そりゃあ・・・。」

「もちろん。」

「結構大変やったんやで。お前荷物多いし・・・。なあ、工藤？」

「おい、バカ服部！」

「ん？　ああっ！」

「ほんまに全部、やったんやね？」

「「はい・・・。」」

パシンっ！！！！

がたん

和葉は腹立ちながらリビングに入って行った。

「ほんま腹立つ。」

「ああ和葉ちゃん。部屋、分かったかしら？　平次君もいたし・・・。」

「へえ、有希子さん。」

「和葉ちゃん、なんかあったの？」

「平次の奴、勝手に荷物片つけたんよ！　しかも工藤君にまで手伝わせて。全部残らず！」

「ええっ！！」

「ほんまデリカシーがないというか・・・よく分かってないというのか・・・ほんま腹立つ！」

「男ってそんなもんよ。」

「それ、わたしも分かるわ。」

「園子ちゃんに志保ちゃんやん！　ひさしぶりー！」

ソファに寝そべりかかっている園子と、料理中の志保が、和葉を見て、一瞬目を見張った。

「よお和葉ちゃん。にしても、男ってホントそうよね？　ほら、真さん。よく部屋の片つけ手伝ってくれるんだけど、下着とか見つけちゃうと、急に真っ赤になって態度がおかしくなっちゃうのよね。あいかわらず古風というかなんというか・・・。」

「わたしのところもよ。片つけなければいいのにって思うわ。」

「青子んとこもだよ。快斗、いちいち報告してくるの。下着の色とか・・・人前で言わないだけましだけど。」

「「「・・・。」」」

「そういうのって、慣れよ。」

「ああ、それわかるわ。」

有希子と千影が新聞を見ながら言った。

「優作とか、最近うまいわよ。コートとかだけうまいくらい片つけてくれるのよ。」

「盗一も。盗一、マジックとか仕掛けてきたりするのが玉にきずなんだけど。」

「小五郎君なんか意外とうまそうだけど・・・。」

有希子が英理に聞いた。

新聞を必死に見ていた英理だったが、顔をさっとあげた。

「意外とだめなのよ。あのヌケサク。」

「へー、そうなの。」

確かに、向こうで新一たちに「女性を見くびってはいけない。」と教えている優作たちのあいだで小さくなっている。

英理は新聞片手にため息をついた。

「英理ちゃん気にしないで。ほら、意外とラブラブ・・・でもないか？」

「・・・もうそんな話はやめ！　もうこの事件なんなの？　さっぱり分からない。」

「ええ。優作たちも言ってたわ。謎が多すぎるし・・・捜査が妨害されすぎよ。」

「盗一や有希ちゃんや快斗君の変装や協力がなかったら、今頃お手上げだったってところよね。青子ちゃんもいろいろあったみたい。」

「どういうこと？」

「青子ちゃんは捜査2課でしょ？　だけど捜査1課や弁護士組がおおっぴらに捜査できないって知って、こっそり協力したの。」

「ええっ！！」

青子はある夜、仕事の後、たくさんの資料が保管してある資料庫に入った。

普段はキッド絡みの資料にしか興味を示さないのだが、今日は殺人絡みの資料に目を走らせた。

「ここだ。えっと・・・ない？」

資料はなかった。

「なんで！？」

「おかしいだろ？」

「え？　やだお父さん、びっくりした・・・。」

中森銀蔵がため息をついた。

「その資料があるべき場所には、この書類が挟まってたよ。読んでみろ。」

「え・・・？」

「命令だってさ。宝石泥棒を捕まえろって。間違いない、上からの

圧力だ。」

「青子たちがあの事件を調べてるから？　どういうこと？」

「その書類の裏、見てみろ。白馬警視総監からだ。」

2人の中森警部へ。
上から圧力がかかっている、
気をつけろ。頼むからこっち
に集中してくれ。
いつか真実を。白馬

「どういうこと？　お父さん。」

「青子、もうやめだ。警察って言うのはな、組織なんだよ・・・悔しいけど、組織の中で生き延びなきゃいけないんだ。白馬警視総監すら上からの圧力に苦しんでいる。今は耐えなければ。」

「うん・・・。」

「青子ちゃん、そんなことあったん？」

「うん。ごめんな。」

「けど、困ったわね。」

「どういうこと？　お母さん。」

蘭がカレーの皿を運びながら言った。

「つまり、最後の頼みの綱だった・・・警察幹部すら捜査できないってこと。」

「要するに蘭・・・もっと上。官僚や政治家も関わっている可能性が高いんだってことだ。」

新一の声が、リビングを震撼させた。

しかし、誰も反論しなかった。

みんな同じ考えだったからだ。

陰謀と法廷　5意外なお客さん

「いただきまーす。」

夕食の時間になり、仕事や学校の話題で盛り上がった。

そのとき、インターホンの音が鳴り響いた。

おもわず身構えてしまう。

だが、意を決して出た蘭が笑いながら帰ってきた。

「お客さんだよ！」

九条検察官だった。

「九条さん・・・。」

「御無沙汰してます、妃・・・毛利先生。」

「やだ九条さん、妃でいいのよっ。」

「はい！　では妃先生。実はお話があって。栗山さんに教えてもらいましたけど、捜査が妨害されているって、本当ですか？」

「ええ。わたしにつながる人みんな。あなたこそ大丈夫なの？」

「わたしたち検察も歓迎はされていません。だから不安になってし

まって。一歩踏み込んだ捜査もしたいのですが・・・・。」

「あなたも・・・・。」

「公平な捜査と裁判が第一です。だからこれを・・・検察から・・・・。」

「これは？」

「お母さん・・・捜査資料だよ。最新の、より詳細な・・・・。」

「九条検察官、これ、いいの？」

「上からはストップがかけられました。けれどこれが、地位に関係なく、すべての検察官の意思なんです。」

「どういうこと？　まさか、あなたたちも、官僚や政治家クラスの人間から？」

「確証はありませんが。」

「そんな・・・なんなの？　この事件・・・・。」

「構いません。いざというときは、検察全員やめますから。そうすれば大きな話題になって、真実が明かされるかもしれません。」

「ありがとう。」

「妃先生。こんなこと言っていいのかわかりませんが・・・裁判、頑張ってください。」

「ええ・・・。」

「九条検察官。よかったら一緒にカレー食べません？　わたしの手作りなんです。」

「・・・いただきます。」

九条検察官の資料は、だいたいこうだ。

組織のメンバー　ジン編　美容師アドニス

わたしの名前はアドニス。黒の組織で働く美容師です。

わたしたちは主に変装などの補佐を行っていましたが、ときには普通の美容師みたいなこともしています。

わたしは美容師を目指して、高校卒業後、専門学校に進みました。しかし就職できず、海外に行くことも考えましたが、両親の反対にあい、あきらめました。

ふさぎこむ毎日でした。ふさぎこんでいてはダメだと思い、わたしはあるセミナーに行きました。

そこでは専門学校では学ばない、本当に多くの実用的なことを学びました。うれしくて、わけも分からず必死に学んだことは覚えています。

そのセミナーが終わるころ、わたしは呼び出され、いい就職先があると聞きました。

若手の科学者が集まって研究するグループ専属の美容師です。

そのグループは、時には危ない薬を開発してしまうこともあるが、とても有能なのだそうです。ただ、ほとんどが住み込みで働いている、人嫌いな研究者で、あまり外に行きたがらない者も多いらしいと聞きました。だからこそ、同じく住み込みで働いてくれる人がほ

しいのだというそうです。

割のいい仕事で、勝ち目はないと思いましたが、ダメもとで行きました。

指定された会場にはたくさんの人がいましたが、みんな別々の部屋に入らされました。

そこでずっと心理テストのようなものと、面接を受け、体力テストのようなものも受けました。

受かりました。さっそく薬品会社の敷地内の部屋に移り、美容師としてさらに研修や仕事を積み重ねました。

科学者とはずいぶん不思議な生き物のようですね。

身なりに構わず研究なさっている方や、変なセンスの持ち主の方も多くて驚きます。

そのうち、この組織は大変危ないものだということを知りました。怖さや何かもありましたが、この組織にいるよりほかはありません。ただでさえ両親や周りに反対されていたのですから、やめて実家に帰ることもできません。頼れる友人もいません。

この組織は危険でも、待遇は良く、いい生活もできます。同僚も先輩もいい人たちばかり。それにこの人たちの髪を切ったり、仮装の

趣味につきあったり、お忍びで出かけるための変装を手伝うことが犯罪なのでしょうか？

さてある日、真っ黒な服に（この人たちは黒が好きで、服はやたら黒なんです。）、ロングヘアの男がやってきました。この男はかなりの有力者で、大体は先輩が担当していたのですが、今日はその人がいなかったのです。

「髪型はどうされますか？」

「毛先をそろえる程度で。」

そういって男は目を閉じた。

正直ホッとしました。その男ときたらすごい目つきで、びくびくし通しだったんです。

「きれいなロングヘアですね？」

「・・・。」

「男の方でここまで伸ばす方は少ないんですよ。お手入れも大変ですし、まわりの視線も集めてしまいますから。」

「・・・。」

「少ししゃべりすぎましたね？　すみません。つい話してしまって・

・・・。」

「構わない。」

「え、ええ。」

「・・・・。」

「この組織の方はわりときれいな髪の方が多いんですよね。もちろんあなたもですよ。」

「他の組織にもいるさ。」

「えっ？」

「いるんだよ。黒いロングヘアをたなびかせて俺たちに紛れ込んだ、ＦＢＩの捜査官がな。」

「噂はお聞きしています。しかし、その捜査官は死んだと。」

「のはずだがな。」

「・・・・。」

「惜しい奴だよ。あいつがＦＢＩじゃなければとっくに俺なんか・・・。」

「どうされたんですか？」

「敵の俺すら、心のどこかで恐れてたんだよ。あの赤井秀一をな・・

・。あいつには負けていただろうな・・・・。」

「でも死んでしまいましたから。」

「死んじゃいない・・・死んでほしくなかった・・・・。」

「えっ？」

「なんでもない。気にしないでくれ。」

「はい・・・・。」

後でわたしたちが逮捕され、ジンと呼ばれる男は、冷酷で残忍な男だと聞きました。

けれどそうとは思えません。

彼もやはり、人間なんです。

陰謀と法廷　６検察の資料

東京大阪親子連続殺人事件

関係者

被害者

金崎幸雄（６８、男）
資産家。会社を経営していたが、世代交代のため、ここ最近は仕事を減らしている。

金崎志乃（６７、女）
幸雄の妻。上品な社長夫人。

金崎俊彦（３０、男）
幸雄の息子。長男。有名大学卒業後、父の会社を継ぐべく、働いていた。

容疑者

大沢義光（６０、男）
金沢邸の近所に暮らす男。静岡出身。長い間中小企業で働いていた。退職したばかり。里子の砂子を事故で亡くしている。
事件当日は家にいたと主張している。アリバイはない。

大沢秀実（５８、女）

義光の妻。ある会社の経理を担当。実子はいないが、里親として子供を育てたこともあり、ベテラン経理として若手を支えている。事件当日は、中学時代の友達と会うため、出かけていた。アリバイはあるが・・・。

金崎まどか（２８、女）
関西出身。両親と高校生の時に死別、親戚にたらいまわしにされるなどつらい思いをしたが、成績がよく、奨学金をもらって大学まで進んだ。卒業後は俊彦と結婚。美人で優秀な妻ではあったが、志乃とはあまり折り合わなかったらしい。

その他

大沢砂子（２８、女、故人）
義光と秀実の娘。養女。実の両親と死別し、大沢家に引き取られた。幸雄の会社で働いていたが、つい最近起こった不慮の事故で亡くなってしまう。

山崎義三
関西出身の大物衆議員。ベテランで一時は首相候補にもなったが、ある議員の汚職事件に少なからずかかわったとされ、控えめ（？）になった。今回の事件の後、急に羽振りが良くなった。

長谷部公久
山崎議員の秘書

秋田栄
秀実の中学時代の友人。長いこと秀実とは音信不通であった。

山崎優奈
山崎議員の一人娘。ちちに似ず、優しいおっとりした人。だが立派な弁護士である。そろそろ妙齢で、お見合いなどで忙しいらしい。

「これは・・・。」

英理は資料をめくりながら、九条検察官を見た。

「本当にいいの？」

「構いません。検察全体の意思ですから。」

「でも・・・。」

今度は蘭だ。

「もし不当に解雇されたら、裁判よろしくね。」

「九条検察官・・・。」

「では失礼します。そうそう、蘭さん。おいしかったわよ、カレー。」

マドンナはさみしげに笑って去って行った。

クイーンですら、何も言えなかった。

「やっぱりだめか。」

佐藤刑事は途方に暮れていた。

仕事や育児の合間を縫って捜査しているのだが、やはりできない。

捜査のために訪ねることも、とにかくできない。

金崎家は基本留守だし、いても追い返されてしまう。

大沢家は割と寛大だが、秀実にいくら聞いても、同じ事実しか分からない。

「あら、もうお昼ね。コンビニコンビニっと。そういえばここ。」

佐藤刑事はショッピングセンターの前にいた。

めでたくお見合いが成立し、幸せいっぱいの由美が言っていた言葉を思い出す。

「あのショッピングセンター、ほらあの新しいやつ。あれの中にある和食屋さん、とにかくおいしいって評判なんだって。よかったら行ってきたら？」

（仕事も暇だし、行ってみようかな。）

佐藤刑事はショッピングセンターに駆け込んだ。

その後ろに、１人の男がいた。

スーツをピリッと着た男である。

さらにその後ろを、別の男がやってきた。

妙にだぶだぶな服が不釣り合いだった。

「ここか・・・時間通り。」

陰謀と法廷　8再会

とにかくレストランは見つけたが、さすがに混んでいた。

お昼時でどの店も混んでいる。

「申し訳ありません。あと1時間くらいしたら、すいてくると思いますが・・・。」

「いいのよ。そんなに急いでいるわけじゃないし、ほかのお店や何かを見ておくわ。」

「では、御予約しておきましょうか?」

「ううん。そんな大げさなことしなくていいわ。」

「ではこちらで名前を控えさせていただきます。そうすればよりスムーズに入れますよ。」

「ええ、ありがとう。」

すこしばつの悪そうな、申し訳なさそうな顔をした店員に見送られ、佐藤刑事は途方に暮れていた。

とりあえずスーパーによって、家族へのお土産を買い（夕食は母親が作ってくれるので。）本屋などを回ってみた。

するともう1時間。レストランは下だが、あいにく彼女はうろうろしている間に、6階まで来てしまったらしい。

どうやら下へ行く前にトイレによるようだ。

トイレはすいていて、佐藤刑事のほかは、髪の長い、黒っぽいスーツを着た女性が洗面台の鏡の前で、メイク道具を探っているだけだった。

それをちらっと見て、佐藤刑事もバッグを探った。

もう1人女性が来た。

短い金髪を揺らしながら、「フフーン♪」と鼻歌を歌っている。

おもわず佐藤刑事は顔を上げた。

髪の長い女性もはっと顔を上げた。

ちょうど金髪の女も鏡のほうを見た。

3人の目が鏡の中で合う。

「佐藤刑事・・・？」
「水無・・・サン？」
「ジョディ先生？」
3人は同時に振り返った。
「やだ！　久しぶり！」
「何年ぶりかしら！？」
「最後に会ったのは・・・京都の事件？」
「ううん。テレビとかでも会ってるわ。」
「2人とも、アメリカに行ってしまったと。」
「今まではね。でも、新婚休暇もらえたから♪」
「新婚？」
「休暇？」
「あら、報告していなかったかしら？　1年くらい前にシュウと結婚したの。でもお互い忙しくってね、結婚してあまーい新婚生活、なんてもんじゃなかったの。シュウの御家族にあいさつに行くでもないし、わたしも家族を亡くしているから挨拶とかも周りにしなかったし。そうしたらボスに言われたのよ。『休暇でも取ってたまに

は夫婦らしいそぶりを見せてくれ』って。」

「どういうこと？」

「仕事の延長戦みたいな結婚だったから、夫婦らしくないらしいの。で、長期休暇取らされた・・・って設定で日本に遊びに来たの。ちょうどアメリカからの逃亡者の情報もあって日本で捜査しなきゃいけなかったし、ｃｏｏｌ　ｇｕｙ　たちが悩まされている事件にも興味があったしね。」

「へぇ～、あの赤井さんと？　ジョディ先生、すごい人と結婚しましたね。」

「ええ。かなり強烈な。黒の組織もずいぶん怖がってたし、アメリカでも大活躍とか。」

「仕事一筋で、あんまりいいｈｕｓｂａｎｄじゃないですね～。」

「とかいってる佐藤刑事も。高木刑事と結婚したんでしょ？」

「ええ。」

「あの刑事さんと！？　彼、おっちょこちょいだけど、いい人よね。」

「前からラブラブだったって聞いてたけど。」

「そういえば水無さんはあんまり噂を聞かないけど。」

「ええ、仕事柄忙しくて。」

「そういえばキールさん、あなたたちＣＩＡは今どんなことをしてるのかしら？　この間もＦＢＩの・・・。」

「ええ、あのことはすみませんでした。あなたたちＦＢＩの任務については詳しく知らされていなかったから、ノーチェックだったの。」

「でも分かるでしょ？　わたしたちが張り込んでじっくり犯人を追い詰めようとしていたこと。現にキャメルが『水無怜奈を見た』ってあの後騒いでいたのよ。ってことはわたしたちが張り込んでいたことも御存じだったってわけ。」

「たしかに、キャメル捜査官は見かけましたし・・・わたしも何人かＦＢＩの方を見かけましたから、ＦＢＩも動いていることを知りました。けれどわたしたちはあくまでＣＩＡの任務を優先させますから。そしてその内容が、強行突破なだけだったんです。」

「あの・・・２人とも日本で物騒な話ししないでくださいよ～。」

「そうね。」

「ところで水無サン。あなた本当に今、なにしているの？」

「あの事件の後、しばらくＣＩＡの他の任務に徹していました。けれど、上から『若いのにもうずいぶん苦労した。今までつらい任務も多かったろう。』って、と・り・あ・え・ず、現役から引退ってことになったんです。で、後輩の教育とかにしばらく携わっていたんです。その時、日売テレビの方から、声がかかったんです。『またアナウンサーとして一緒にやらないか』って。わたしは任務とは

いえ、黒の組織にいた身。最初はお断りしました。」

水無怜奈は、口紅を塗り直しながら淡々と言った。

「でも、ヨーコちゃんからも連絡をもらって考え直したのよ。まあCIAの任務もあるし、臨時のアナウンサーみたいな感じで今は働いているわ。」

「そうだったの・・・なにかあったらFBIに来てね。」

「ありがとう。」

「あの・・・こんなところで立ち話はやめませんか？」

「そうね。」

「restroomだものね。」

「ここにおいしい日本食レストランがあるの。これからそこで食べるつもりなんですけど、一緒にどうですか？」

「いいわね。ワタシニホンショクダイスキデス。」

「久しぶりだわ。任務でアメリカに行ってたから。」

「じゃ、いきましょー！」

陰謀と法廷　9制圧

笑顔でトイレから出ようとした時だった。

「きゃぁあああ！」

突然の悲鳴。

バンバン！

「何？」

「銃声？」

「どうして？　ここは日本なのに！」

佐藤刑事はジョディと怜奈（あくまで一般人）をかばった。

1人でひそかに下の階を見た。

「黒ずくめの防護服・・・。ライフルやピストル・・・。かなりの量ね。」

佐藤刑事はとっさに携帯のカメラで数枚の写真を撮った。

銃を持った男たちが従業員や客を追いたてて、エントランスホールに集めている。

「おい！　早くシャッターを閉めろ！」

「防犯装置を切れ！」

「まだあるんだろう？」

「鍵をよこせ！」

銃に追い立てられた従業員が、ふるえる手でシャッターを下ろした。

「防犯装置、電源切りました！」

「1階、制圧！」

「北口、封鎖しました！」

「2階、制圧！」

「メインセキュリティーセンター制圧！」

「2階の客を1階に降ろします！」

「3階、制圧！」

「従業員控室、制圧！」

計画的に次々と制圧されていった。

「佐藤刑事！」

ジョディが動画をとっていた佐藤刑事をトイレに引き戻した。

「危険すぎるわ！」

「隠れていなきゃ！」

あわてて用具入れに身を隠した。

モップやバケツの間で息を殺して待っていると、ドタドタと足音がした。

「男子トイレは空っぽだ！」

「女子トイレはっと。」

足音が近づく。

扉をあける音もした。

「いなさそうだな。」

「6階、制圧！」

「すべての階を制圧しました！」

「御苦労！　そのまま見張りを続けろ。」

「了解！」

「いや、一旦降りてこい。打ち合わせがしたい。」

「分かりました。」

あっという間だった。

法廷と陰謀　１０外の混乱

「高木刑事？」

「あっ、赤井さん！？　どうして？」

「妻から連絡をもらいまして。」

高木刑事は一瞬考え込んだ。

「妻？」

「ジョディだ。」

「えええっ？　ジョディ先生と？？？」

「佐藤刑事や水無怜奈も一緒とか。」

「警察の方に妻から連絡が入りまして・・・その・・・写真や動画もあって、現在解析中ですが、ご覧になりますか？」

「頼む。」

「こちらへ。臨時の本部です。」

「ＦＢＩは北口の方に本部を張った。ＣＩＡは読売テレビと合同で近くにいるはずだ。後で移動させよう。」

「了解です。」

2人が人ごみをかき分けてやっとバンにたどりついた。
さながら中継車である。

「頼む。入れてくれよ！」

「部外者はだめだ！」

「部外者じゃないよ！　関係者だよ！」

「関係者？　じゃあ身分証明書を。」

「えっと・・・・。」

「きみは・・・あのときのボウヤじゃないか。」

本堂瑛佑だった。

「あっ、赤井さん！　それに高木刑事。」

「しばらくだな。」

「ああっ、君あの時の、瑛佑くんか！」

若手の刑事が驚いた顔をした。

「高木警部の知り合いでありましたか！？」

「ああ。彼は本堂瑛佑君だ。水無怜奈さんの弟さんで、例の組織と戦った時もだいぶ活躍してくれたんだ。今は・・・？」

「ＣＩＡで働いています。最近は日本でゆっくり任務にあたっています。」

「任務って？」

「あんまり大きい声じゃ言えないんですけど、最近・・・対中国、対アジア路線が活発になっていて、まぁお手伝いみたいなことをしています。それよりも姉が・・・姉さんがこの中にいるって本当ですか？」

「えっ、君もかい？　僕の妻もここにいて・・・。」

「高木刑事、とにかく安全を確認しなければ！　赤井さんも・・・・・・協力してくれますか？」

瑛佑は赤井秀一の立場も気がついたようだ。

「もちろんだ。そのためにはまず、このバンで情報収集をしなければ・・・。」

「しっ、失礼しましたぁ！」

若手の刑事がさっと飛びのいた。

バンの中は機械や刑事がうごめき、騒々しかった。

その中で、目暮警部、いや今は目暮警視だが、（警部のが親しみやすいので、今でも警部と呼ばれている。）一人座っていた。

帽子を目深にかぶり、顔はよく見えない。

「ああ、高木君。」

「目暮警部もメールは見ましたか？」

「ああ。佐藤君がわしの携帯にも送ってくれてな。君が警視庁に転送したものとほぼ同じ内容だ。写真や動画はすでに解析をしておる。」

「佐藤さんのメール、佐藤さんらしかったですね。」

暗い雰囲気を吹き飛ばそうと、あえて高木刑事は冗談を言った。

本当は妻の身が心配でならない。

（刑事だとばれてしまったら、見つかってしまったら・・・。）

不安でたまらない。

「ああ、佐藤君らしかった。人質からのあそこまで的確な指示をつ

けたメールはまずないだろう。」

「ええ。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2760o/

数年後の日常

2012年1月6日14時46分発行